大乱闘スマッシュブラザーズ　Abandon World

アヤ・ノア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スマブラの二次創作長編小説です。

～ストーリー～

謎の少女によって荒廃したスマブラ世界に飛ばされたファイター達は、

世界を救うために冒険する事になるが……。

※Ｆｏｒまでの時間軸なので、ＳＰキャラはいません。

目次

プロローグ ―― 1
第１話　日常と非日常 ―― 3
第２話　最後の希望 ―― 10
第３話　天使と女神 ―― 14
第４話　三人の少年 ―― 20
第５話　炎の紋章を掲げて ―― 25
第６話　荒地に咲く華 ―― 32
第７話　宇宙を翔ける者 ―― 38
第８話　生き残るために ―― 43
第９話　邪悪なる敵 ―― 48
第１０話　希望を目指して ―― 53
第１１話　四つ首の亀 ―― 58
第１２話　仲間割れ ―― 64
第１３話　魔よりも恐ろしきは人 ―― 70
第１４話　家族との再会 ―― 74
第１５話　仲間を探すために ―― 80
第１６話　クッパ親子登場 ―― 84
第１７話　ポケモントレーナー・ロート ―― 90
第１８話　息ぴったりの登山家 ―― 95
第１９話　ポケモンとの出会い ―― 102
第２０話　けものパニック！ ―― 107

プロローグ

多くの戦士達が乱闘をし、生活をし、暮らしていく「この世界」――争いの世界。
そこは、マスターハンドとクレイジーハンドにより創造され、
多種多様な生物や存在が共存し、絶妙なバランスで平和が保たれていた。
だが、「この世界」は1つだけではない事をご存じだろうか。
乱闘しなくてもいい世界。
乱闘しなければ生きていけない世界。
人間しか存在しない世界。
人間が存在しない世界。
それらは「パラレルワールド」と呼ばれ、この平行線上にいくつも存在している。
だが、パラレルワールド自体は戦士達の故郷と異なり、互いに干渉し合う事はない。
「この世界」の住人が、異世界の存在は知っても、
パラレルワールドの存在を知らないのは当然である。
――はずだった。
「……自然の歌が、聞こえない……」
どこかのパラレルワールドにて、一人の女性が悲しそうな声でそう言った。
彼女は、愛していた自然が、失われてしまった事を嘆いているのだ。
「……この世界も、もう終わりかも入れない……。だけど、終わりは来てほしくない……」
女性はこの荒廃した世界を終わらせたくないという意志を持っていた。
しかし、彼女の周りに他の人間はいなかった。
「このまま、終わりを先延ばしにするか、早く終わりが来るのか……」
そう言うと、女性の目から涙がこぼれた。
「……いいえ、どちらの結末にもしたくないわ。何としてでも、この世

界を救いたい……！」
女性が持っていた杖を掲げると、空に白い亀裂が走った。
「この世界自体が弱まってきているから、これ以上空間を開けたくはない。
だけど、この世界のためだったら……！」
女性が精神を集中させ、さらに杖に力を込める。
すると、白い亀裂は徐々に大きくなっていった。
ある程度亀裂が大きくなったところで、女性はぺたりと座り込んだ。
「……正史世界と繋げておいたわ。ここから、みんなが来ればいい」
……どうか、この世界を、救って。
女性は最後にそう言い、希望を託すのであった。
次回予告。
「流石はスマブラの顔といったところだな」
「誰が勝つのかしら？」
「それを予想するのも、この大乱闘の楽しみだ」
いつものように大乱闘をしていた、スマブラメンバー。
だが、スマブラメンバーの日常は、長くは続かなかった。
――お願いします。どうか、この世界を救って。
突如として、世界を救ってほしいと頼まれた彼らが行った先は。
「うわっ……眩しい……！」
「何も見えない……！」
パラレルワールド、だった。
大乱闘スマッシュブラザーズ　Ａｂａｎｄｏｎ　Ｗｏｒｌｄ

第1話　日常と非日常

ここは、争いの世界の拠点、スマブラ屋敷。
「ふわぁぁぁぁ……」
「おはよう、兄さん」
寝ぼけ眼でリビングに来るスマッシュブラザーズのリーダー・マリオ。
そんな彼を出迎えてくれたのは双子の弟ルイージ。
「今日の朝食はファルコンが作ってくれるみたい」
「あいつは料理が上手いのか？」
「そうみたいだよ。意外だよね」
ファルコンは多くの仕事をしており、また、その出自には謎が多い。
それでもスマブラメンバーとして平等に扱われるのは彼の腕と心根の良さからだろう。
「あいつが作る料理はどんな味だろうな。
いつもリンクのものばかり食ってたから、新鮮な気分になるぜ」
「よし、できたぞ」
そう言ってファルコンはスマブラメンバーに朝食を出した。
今日の朝食のメニューはご飯・焼き魚・味噌汁だ。
「いただきます」
手を合わせた後、マリオ達は朝食を食べた。
「ん、美味いな」
「ちょっと塩が多いけど、まぁまぁな味だな」
ファルコンは喫茶店の店長もしているため、実は料理もかなりできるのだ。
「ははは、喜んでもらえると嬉しいよ」
笑いながら朝食を食べるファルコン。
「そういえば、今日の乱闘はどこで行うんだ？」
「空中スタジアムみたいだぞ」
「あそこか」
それを聞いたマリオは、二度起こった亜空軍異変を思い出した。

第一次亜空軍異変・第二次亜空軍異変共に、
空中スタジアムから亜空軍が襲来した事で始まったからだ。
「楽しみだな、リンク」
「ああ」
「じゃあ、朝食を食べ終わって片付けたら早く空中スタジアムに行こうぜ！」
朝食を食べ終わり、食器を片付け終わった後、
マリオ達は乱闘の舞台となる空中スタジアムに向かった。
「よーし、早速みんなの乱闘を見ようぜ！」
「マリオ、第一試合はあなたが出るのよ？」
「はっ！　そうだった！」
ピーチに言われ、はっと気付いたマリオは、大急ぎで乱闘が行われる会場へ向かった。
今日の乱闘の試合は、以下の通りである。
第一試合：マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ
第二試合：ゼルダ＆シーク、ネス＆リュカ
第三試合：ルカリオ、ソニック、ゲッコウガ、ロックマン
第四試合：マルス＆ロイ、ルフレ＆カムイ
ちなみに、全ての試合でストック制であり、第一試合と第三試合は通常の大乱闘、
第二試合と第四試合はチーム戦である。
第一試合は、スマブラ四天王と呼ばれるスマブラの顔の大乱闘だ。
観客は試合が始まる前から盛り上がっていた。
「流石はスマブラの顔といったところだな」
「誰が勝つのかしら？」
「それを予想するのも、この大乱闘の楽しみだ」
「Ｒｅａｄｙ……Ｇｏ！」
そして、合図と共に、第一試合が始まった。
合図と同時に最初に動いたのは、リンクだった。
リンクはカービィに近づき、剣で斬りつける。
「うわぁぁ！」

「行くぞ、マリオ！」
ピカチュウがマリオに電撃を放って攻撃する。
「でやぁ！」
マリオも負けじとミドルキックでピカチュウを攻撃する。
「いっくよー！　ハンマー！」
「ぐわぁ！」
カービィはリンクに近づき、ハンマーで殴りつける。
その威力は溜めなくともそれなりに強い。
「マリオ！　頑張って！」
「リンク！　そこです！」
キノコ王国の王女ピーチと、ハイラル王国の王女ゼルダがそれぞれの関係者を応援する。
「二人とも楽しそうですね～」
「当たり前でしょ、ヨッシー！　だって、マリオが出るんですもの！」
「まぁ、当然ですよね～」
「リンクもなかなかの剣の腕前だね」
シュルクもリンクの動きを見ながら感想を言う。
「行け行け～！　カービィ！」
「ぴかにいちゃんがんばるでちゅ～！」
トゥーンリンクやピチューなど、子供達も応援に入った。
「たぁ！　とぉ！」
「食らえ！　両足蹴り！」
ピカチュウは両足を突き出してリンクを蹴る。
マリオは隙を突いてピカチュウをキックで攻撃しようとするが回避される。
「ファイナル……カッタァーーー！」
「おっと！」
カービィの攻撃もピカチュウは軽々とかわす。
「ピカチュウ、速いな」
「足の速い奴が有利と誰かが言ってたが……」
試合を観戦しているフォックスやファルコが言う。

「ハンマー！」
「ふっ」
そんなピカチュウを止めるべく、カービィはピカチュウに突っ込んでハンマーを振るう。
だがそれも、ピカチュウは軽々とかわす。
「果たしてこれはどうかな？」
「ぐはっ！」
が、リンクの爆弾には反応できず、爆風を受けてしまう。
「でかいのお見舞いしてやる！　ファイア掌底！」
「ぐはっ！」
マリオが炎を纏った掌底でピカチュウに大ダメージを与える。
軽く舌打ちしたピカチュウが反撃とばかりにマリオに電撃を放つ。
「えいっ！」
その隙にカービィが回し蹴りでピカチュウを攻撃して蓄積ダメージを増やす。
「倒れろ！」
「ファイアボール！」
ピカチュウはカービィに接近して電撃を放ち大ダメージを与える。
マリオもリンクの盾が届かない場所にファイアボールを放った。
試合は一進一退の攻防が続き、全員の蓄積ダメージも溜まっていった。
早めにこの試合を終わらせるべく、リンクはある行動に出る。
「とぉっ！　はっ！　てやぁ！」
リンクは動きが鈍いながらも他の三人を同じ位置に誘い出す。
そして、パワーを溜めた後、スマッシュ斬りを繰り出して三人を同時に吹っ飛ばした。
マリオは復帰できたものの、体重の軽いカービィは撃墜され、
ピカチュウも何とかギリギリで崖に掴まった。
「これで残るは三人か。よし、どんどん行くぜ！」
「そうはさせないぞ！」
リンクは弓矢でマリオを攻撃するがスーパーマントで跳ね返され

る。
「いてっ！」
「よし！」
その隙にマリオに掴まれてしまい、ジャイアントスイングで投げ飛ばされた。
リンクはフックショットを使い崖に掴まった後、上がる時の切り上げでマリオを攻撃する。
「しぶといな、リンク」
「へっ、俺も伊達に勇者をやってないさ。さぁ、反撃と行くぜっ！　回転斬り！」
「うわぁ！」
リンクはマリオを回転斬りに食らわせ、マリオを吹っ飛ばした後、ピカチュウに近づいてスマッシュ攻撃を溜める。
だが直前でキックを受けて潰されてしまい、さらにショート電撃を受けてしまう。
そこそこ重量のあるリンクでも、
ダメージがかなり溜まっていたため流石にこれには耐え切れずに撃墜されてしまった。
「後はお前だけだな……」
「ああ……」
残ったのは、マリオとピカチュウだけとなった。
彼らを見ていた観客は、より一層盛り上がる様子を見せた。
「ファイア……」
「ショート……」
マリオは、ピカチュウを吹っ飛ばすために、その手に炎の力を溜めた。
ピカチュウも、マリオを吹っ飛ばすために、内部に電気の力を溜めた。
「……電撃!!」
「なっ」
マリオのファイア掌底がピカチュウに届く前にピカチュウの

ショート電撃がマリオに命中し、
結果、マリオは場外に撃墜された。
第一試合は、ピカチュウの勝利に終わった。
「よっしゃぁ！」
「やったぁ！　ぴかにいちゃんがかったでちゅ！」
観客席からは大きな歓声が上がっていた。
他の戦士を応援していた観客も「よくやった」と健闘を称える。
「次の試合はゼルダとシーク、ネスとリュカのタッグ戦か」
「どっちも不思議な力を持ってるからね」
ピットとブラックピットがそんな会話をしていると、もう第二試合が始まろうとしていた。
「この試合、どっちのチームが勝つと思うんだゾイ？」
「そうだな……ゼルダのいるチームだと思う」
「ボクはネスとリュカのチームかな？」
デデデ、ロゼッタ、パックマンの三人が賭けをしていた、その時だった。
――お願いします。どうか、この世界を救って。
「!?」
突然、空から女性の声が聞こえてきた。
それと同時に、空中に巨大な裂け目が現れた。
「なっ、なんだこれは!?」
「まさか、また敵襲か……!?」
あそこから、敵が現れるのか。
マリオ達は身構えたが、数分経っても敵が現れる様子はなかった。
だが、数分後。
その裂け目から、凄まじい強さの光が放たれた。
「うわっ……眩しい……！」
「何も見えない……！」
カービィとリンクもあまりの眩しさに目を覆う。
敵襲でなければ、一体何が起こるのだろうか。
リンクは眩しさに耐えている中でそう思っていた。

そして、眩い光が消えると同時に、マリオ達の姿は空中スタジアムから消えた。

――スマッシュブラザーズ……最後の希望……。

第2話　最後の希望

「……んっ」
　マリオが目を覚ますと、そこは廃墟だった。
「ここ、は……？　誰もいない……？」
　建物のほとんどは瓦礫に埋もれ、自分の周りを見渡したが人の気配はなかった。
　それでも、生存者や仲間を確認するためにマリオは歩く。
「リンク！　カービィ！　ピカチュウ！」
　マリオは特に仲の良い仲間、リンク、カービィ、ピカチュウを呼んだが、声はしなかった。
「一体どこにいるんだよ！　どこに……！」
　マリオが仲間が見つからない事に焦っていると、
　―こっち、こっちよ。
「……!?」
　自分の頭の中に、女性の声が聞こえてきた。
　テレパシーか、と思ったマリオはその声にとりあえず問いかけてみる。
「誰だ、お前は!?」
　―ここから真っ直ぐ東に向かって。そこにあなたが探す仲間はいるわ。
「東……？」
　マリオは女性の言葉を信じられなかったが、考えていても仕方がないと思い、
　彼女の言葉に従って東に向かった。
　しばらく走っていると、マリオは小さな都市らしき場所に辿り着いた。
　そこにはリンク、カービィ、ピカチュウ、そして謎の女性がいた。
　マリオは大急ぎでその都市の中に入った。
「みんな、無事だったか！」
「ああ……あいつが保護してくれたからな」

リンクが指差したのは、女性だった。
「僕はお腹ペコペコだったけど、お姉さんが食べ物を出してくれたから大丈夫だったよ！」
「やっぱりそれかよ」
カービィの発言に突っ込むピカチュウ。
とにかく合流できてよかった、とマリオ達は笑い合う。
「そういえば、あの女性は一体誰なんだ？」
「ちょっとこっちに来てくれ」
マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウはその女性のところに来た。
「初めまして。私はこの『ラストホープ』を治めるもの、アスティマといいます」
金髪に緑の瞳を持つその女性はドレスの裾をたくし上げて四人に自己紹介をした。
「アスティマ！　なんで勝手に俺達をこんなところに飛ばしたんだ！　せっかく次の乱闘を観戦しようと思ったのに！」
マリオはいきなりこの世界に飛ばされたためにアスティマをまくし立てた。
だが、アスティマは表情を変えずにこう言った。
「あなた達をここに呼んだのには訳があります」
「訳なんてどうでもいい！　早く元の世界に……」
「最後まで私の話を聞いてください！」
「……」
アスティマの必死な様子を見たマリオは、何とか落ち着きを取り戻した。
「この世界は今、滅びを迎えようとしています。
私は、この荒廃した世界を救いたくて、あなた達を呼んだのです」
「お前じゃ何とかできないのか？」
「そうだぜ。リンクの言う通り、自分の事は自分でやるんだ」
リンクとピカチュウの言葉を聞いたアスティマは首を横に振った。
「この事はあなた達にしかできないと思ったからです。
何故なら、この世界の脅威は、私一人では対処できませんから……」

「……そうか」
「それに、皆様をここに呼んだ時点で、私は大半の力を失ってしまいました。
なので、私に戦う力は残されておりません。
お願いします、スマッシュブラザーズ！　どうか、この世界を救ってください！」
アスティマは必死で、スマブラ四天王にこの世界を救うように頼み込んだ。
それを見たマリオ達は、彼女の頼みを断り切れない気持ちから、満面の笑顔でこう言った。
「分かったぜ。お前の望み、叶えてやるよ」
「こんなにいい奴の頼みを断るなんて、勇者としては失格だしな！」
「アス姉はとっても困ってるんでしょ？　困ってる人を放っておくなんて、僕にはできないよ！」
「そして、俺達はそんな奴らを助けるために動く。もちろん、お前も入っているぜ！」
スマブラ四天王の曇りなき表情と態度を見たアスティマは、ほっと安心してこう言った。
「ありがとうございます。この世界を本当に救ってくださるのですね」
「ああ！」
「嘘は絶対につかないぜ」
「ねえねえアス姉、それより最初の仲間はどこにいるの？」
「聞くのが早すぎだっつーの」
カービィはいい空気を読まず、仲間の居場所をアスティマに聞いた。
当然ながらピカチュウに突っ込まれる。
「そこの鼠の言う通り、早すぎますわ」
「俺は鼠じゃねぇ、ピカチュウだ！」
「あら、そうでしたね。ピカチュウさま。……それでは、仲間を探します」

アスティマは目を閉じる。
じっと意識を集中させ、この世界にいる者の声を聴く。
―わぁぁ、パルテナ様！　魔物がたくさん！
―ピット、落ち着いて。私の後ろに……。
―僕だって、ちゃんと戦えますよ！
―そう。じゃあ一緒に行きましょう？
―パルテナ様も、僕と一緒に戦ってくださいね！
「……」
「聞こえたのか？」
マリオが、ぼんやりとした様子のアスティマに尋ねる。
「ええ……聞こえたわ。
ここの西から、ピットという少年とパルテナという女性が魔物と戦う声が……」
アスティマによれば、西に行けばピットとパルテナが見つかるらしい。
この二人は、魔物と戦っている様子だという。
「分かった、西に行けばいいんだな？」
「ええ。でも気を付けてね。あなた達だけでは、勝てないかもしれないから……」
「そんな後ろ向きな事は言うなよ、アスティマ」
「そうだよ！　もっと前向きに、前向きに！」
「お前がそんな調子だと俺達の調子も狂うぜ」
「だから、アスティマ、俺達を信じてくれ」
「……そうね。ありがとう、みんな」
スマブラ四天王の励ましの言葉に、アスティマは微笑むのだった。
「それじゃあ、いってらっしゃい！」
「ああ！　行ってくるぜ！」
アスティマに見送られ、スマブラ四天王はピットとパルテナを探すために西に向かうのだった。

第3話　天使と女神

その頃、ピットとパルテナは……。
「パルテナ様！　何ですか、この魔物は？」
「私でも分かりませんわ。冥府軍にも自然軍にもこんな魔物はいませんでしたもの」
不気味な動く死体、ゾンビと戦っていた。
この魔物は皆、生ある者に対する憎悪のみで動いているようで知性は全く感じられない。
「ですがピット、この魔物に知性は無いと見ました。ピット、彼らを上手く誘導しなさい」
「はい！」
ピットは全てのゾンビを一つの場所に誘導した。
「爆炎！」
パルテナはその隙に杖を振り、ゾンビがいる場所に爆発を起こす。
攻撃系の奇跡「爆炎」だ。
爆炎に巻き込まれたゾンビは四散して消滅する。
「やりました、パルテナ様！」
「ピット、油断は禁物です」
「えっ!?」
パルテナの言葉と同時に、大量のゾンビがピットとパルテナを取り囲んだ。
「わわわわ、こんなに敵が！」
「貴方も戦うのよ」
「分かってます！」
ピットは神器、パルテナは奇跡を使ってゾンビを次々と倒しているが、
いくら倒してもゾンビが減る気配はない。
むしろ、どんどんと数が増えているようだ。
「あぁぁ、もう、こんな時に都合よく援軍が来るわけが……」
ピットがそう言って頭を抱えていると、

「あるんだよな」
「その声は……マリオ!?」
ピット達の背後から、マリオの声が聞こえてきた。
「今、助けに来たぜ！」
「僕達がいれば百人馬力だよ！」
「……随分と中途半端な言い間違いだな」
同時に、スマブラ四天王の残りメンバー、リンク、カービィ、ピカチュウも現れた。
「どうしてすぐ、私達がこんな敵と戦っているのか分かったのですか？」
「話は後だ、来るぞ！」
パルテナに理由を話すより、まずはこのゾンビを一掃しなければならない。
マリオ達は戦闘態勢を取った。
「ファイアボール！」
マリオはまず、ゾンビにファイアボールを放って燃やすと、
リンクがゾンビの群れに飛び込んで回転斬りを行う。
その隙にパルテナが瀕死のゾンビをオート照準で仕留めた。
ゾンビはマリオに噛みつこうとしたが、リンクが盾で防いでダメージを最小限に抑える。
別のゾンビがピカチュウを噛みついて攻撃したがゾンビ側が与えたダメージはこれだけだった。
「伊達に親衛隊長をやってませんよ！」
ピットはパルテナの神弓を構え、ゾンビの一体を貫く。
ゾンビは絶叫しながら悶える。
どうやら、この一撃がかなり効いたようだ。
「僕だって！　ストーン！」
カービィがホバリングをした後、石に変身してゾンビを押し潰し戦闘不能にする。
「いくぜ、かみなり!!」
さらに、ピカチュウのかみなりがゾンビ達に命中し、ゾンビの人数

を半分に減らした。
だがゾンビ側もやられてばかりではないようで、
一体のゾンビが変身を解除したカービィを掴んで絞り上げる。
「うわぁぁぁぁぁぁ！」
「まるでリーデットみたいだぜ」
「そんな事はいいから早く助けてよ！」
「はいはい」
ゾンビに掴まれているカービィを助けるため、
リンクは疾風のブーメランでゾンビを気絶させた後に素早くカービィを助ける。
しかしゾンビは容赦なくマリオに襲い掛かり、噛みつこうとする。
「危ねぇ！」
ゾンビの噛みつき攻撃がマリオに当たる直前でリンクが彼を庇い代わりにダメージを受ける。
「リンク、大忙しだな……」
「あ、ああ……」
「大忙し？　それは僕に言うセリフなのでは？」
そう言ってピットはパルテナの神弓を双剣にしてゾンビに突っ込んで連続で切り裂く。
ゾンビに致命傷を与える事はできたものの、戦闘不能にするまでは至っていなかったようだ。
そこにパルテナの爆炎が炸裂し、ゾンビは戦闘不能になった。
「ハンマー！」
「ショート電撃！」
「スーパージャンプパンチ！」
カービィのハンマーがゾンビを吹っ飛ばした後、
ピカチュウがショート電撃を食らわせてゾンビを倒し、
残り一体のゾンビをマリオがスーパージャンプパンチで倒した事によりゾンビは全滅した。
「所詮は数だけのキング・オブ・ザコでしたね」
「キング・オブ・ザコって……。

それよりも、お前達の居場所が分かった理由をまだ話してなかったな。
まずは東に向かってテレポートをしろ」
「えっ、東ですか？　分かりましたよ、テレポート！」
パルテナのテレポートにより、六人はラストホープに移動した。
「ここがアスティマって奴が治めるラストホープだ」
「ラストホープ……最後の希望、という意味ですね」
「ああ」
この荒廃した世界で人々がまともに住む事ができる数少ない場所……。
だから〝最後の希望〟と呼ばれているのだろう。
「ところで、アスティマってどういう人なの？」
「ああ、今から呼んでくる。アスティマー！」
「はい！」
マリオがアスティマの名を呼ぶと、六人の目の前に金髪碧眼の女性が現れた。
「この人が……アスティマっていうんですか？」
「ええ。よろしくね、ピットさま、パルテナさま」
アスティマはぺこりとピットとパルテナにお辞儀した。
「それで、どうして僕達の居場所が分かったんですか？
それに、魔物と戦っていたという事も……」
「あなた達の居場所が分かったのは、私があなた達の声を聴いたからです」
「それで俺達がお前らを助けた、って事だ」
「皆様をこんな事に巻き込んでしまって、本当に申し訳ないと思っています」
「気にしないでください。
僕だって、貴方とマリオ達の助けがなければ、あのゾンビにやられてましたから……」
「こういう時はヤラレチャッタ、って言うのが流儀じゃないかしら？」
「って勝手に僕を殺すなー!!」

アスティマ、ピット、パルテナの漫才を聞いて笑う一同。
その光景は、とても荒廃した世界で行われているものとは思えなかった。
「……それで、アスティマ。私達はこれからどうすればいいのです？」
「あなた達はここで待っていてください。希望を集めるために、そこの四人に活動させますから」
そう言ってアスティマはスマブラ四天王を指差す。
「つまり僕達はここで留守番してろという事ですか？　僕だって、戦えるんですよ！」
しかし、ピットは留守番をさせられると間接的に知ったため腹を立てた。
パルテナはピットを宥めようとする。
「まぁまぁ、ちょっと待ってください。
アスティマ、二人だけで散らばった仲間を探してもよろしいですか？」
「ダメです、二人だけでは危険です。できれば三人以上でなければ……」
「そんなの嫌です！」
「ピット。あのゾンビは私とピットの二人だけで全滅させられましたか？」
「……いえ」
自分達は確かに大量のゾンビを全滅させたのだが、それはスマブラ四天王がいたからだった。
もし自分達だけだったら、ゾンビを全滅できなかったかもしれない。
つまり、二人だけでこのラストホープを出て危険な世界に出たら……。
「今はマリオ達を信じて待ちましょう。そして新たな仲間が来たら、彼らと同行するのです」
「……分かりました」
ピットはパルテナに諭され、渋々ラストホープで待つ事にしたの

だった。
「で、次の仲間はどこにいるんだ？」
「……」
リンクがアスティマにそう問うと、彼女は目を閉じて精神を集中させた。
アスティマの頭の中に、声が聴こえてくる。
―なんで、こんな化け物がいるの……!?
―僕達の世界に、こんなのはいないからだね。
―しっかり相手の動きを見るんだ。
―ゆ、勇気を出さなきゃ、いけないよね？
―そうでなくちゃ、この敵は倒せないよ。
「……少年が三人です」
「どこにいるんだ？」
「南東から声が聴こえてきました」
「よし、そこか。じゃあ、行ってくるぞ。待ってろよ、みんな。必ず、生きて帰ってくるからな」
「では、お気をつけて……」
スマブラ四天王はピットとパルテナに留守を任せ、次の仲間を探すのであった。
「パルテナ様……」
「大丈夫です、彼らは絶対に死にませんよ？」

第４話　三人の少年

スマブラ四天王は次の仲間を探すため、南東に向かっていた。
「次は一体、どんな仲間だろう？」
「声からして、僕と同じくらいの子だと思う」
「だけど、低い声の人もいたぞ」
「そんな事よりも、今は襲われてる奴を助けるのが基本だろ！」
「あっ、そうでした！」
ピカチュウに言われ、マリオ、リンク、カービィは走る速度を上げた。
途中、ゾンビや悪漢に遭遇するものの、彼らの技により軽くあしらうのであった。
その頃……。
「ＰＫファイアー！」
「ＰＫフリーズ！」
ネスが火を放ってゾンビを燃やした後、リュカは冷気を放ってブロブの一体を一撃で倒した。
「凄いね、リュカ。魔物を一発で倒すなんて」
「ネス君だって、ゾンビを燃やせたから……。……怖いけど、生きるために戦わなきゃ」
「はあっ！
……次にゾンビは僕を攻撃し、ブロブはリュカに毒の粘液を放ってくるから気を付けて」
シュルクはモナドでブロブを斬りつけつつ、
未来視（ビジョン）を用いてゾンビとブロブが次に来る行動を予測する。
「う、うん！　うわぁっ！」
「言った傍から！」
ブロブがリュカに粘液を放って攻撃する。
リュカは毒を受けないように上手く動きながら粘液をかわしていく。
ゾンビはシュルクに向かって引っ掻いてきたが、

シュルクはモナドで攻撃をガードしたためダメージを受けなかった。
「こんな穏やかじゃない世界から、一刻も早く脱出したいな……」
「うん。やっぱり平和が一番だよ」
「まずは、この敵を倒さなきゃね」
ネスはバット、リュカは棒、シュルクはモナドを構え直し、残る敵を倒す態勢を取った。
「ＰＫフラッシュ！」
ネスは激しい光を放ってゾンビとブロブを攻撃し、怯ませる。
その隙にリュカがゾンビを倒すべくＰＫファイアーを放ち、
それが致命傷になったのかゾンビは崩れ落ちる。
リュカはそれを見て気を失いそうだったが、ネスに支えられて自分を持ち直す。
「さぁて、敵は残り1体だよ！」
シュルクは残りの敵を倒すべく、モナドを頭上で回転させてパフォーマンスをしつつ、
とどめのモナドスマッシュをブロブに放ち、ブロブを戦闘不能にしたのだった。
「よし、これで敵は全滅したね」
「よかったぁ……」
リュカがほっと一安心していると、どこからか足音が聞こえてくる。
思わずひっ、と怯えるリュカだったが、
「助けに来たぜー……って、もう終わったのかよ」
「あっ、マリオさん」
それは、スマブラ四天王の足音だった。
「魔物は全部倒したのか？」
「うん、シュルクさんとネス君のおかげでね」
「何遠慮してるの、リュカだってあの魔物をＰＫフリーズ一発で倒したじゃないか！」
「……あ、うん、そうだね」

親友のネスに言われて少し照れるリュカ。
「それで、僕達に何の用があるんだい？」
「アスティマって女に頼まれて、この世界に散らばっている仲間を探しに来たんだ」
「へぇ、彼女はどんな人なんだろう」
「詳しくは僕達についていけば分かるよ」
「じゃあ、行こう！」
カービィに先導され、マリオ、リンク、ピカチュウ、ネス、リュカ、シュルクはラストホープへ向かっていった。
「お帰りなさい」
アスティマはドレスの裾をたくし上げてマリオ達を迎える。
「無事でしたか？」
「ああ、この通り怪我はしなかったぜ」
「本当によかったですね」
ピットとパルテナもマリオ達が無事だったため満面の笑みを浮かべる。
「これでここに集まった仲間は俺達も入れて合計９人か」
現在、スマブラ屋敷に住む者は６０人前後で、まだまだ足りない。できれば、早めに全員救出をしたいと思っていた。
「アスティマ、次の仲間はどこにいるんだ？」
「……」
マリオがアスティマにそう言うと、アスティマは既に精神を集中させていた。
「ねえアス姉、どうしたの？」
「こら、話しかけるなカービィ！」
―なんだ、こ……ザザー……は……ザザー……
―知らない……ザザー……
―化け物……ザザー……こんなの……ザザー……
―気を付け……ザザー……
―マリ……ザザー……早く……ザザー……
「はぁ、はぁ、はぁ……」

アスティマは、カービィに声をかけられたせいで集中力が途切れたらしく、
彼女の中に入ってきた情報は断片的なものに留まった。
「あなたが声をかけたせいで、まともに情報が手に入りませんでした」
「ご、ごめん……」
「で、誰の声が聞こえたんだ？」
「女性の声と、青年の声です。女性はマリ……と呼んでいました」
マリ、とは、恐らくマリオの事だろう。
スマブラメンバーの中で、最もマリオを信頼している女性といえば……。
「大丈夫ですかね、ピーチさんは」
「ああ、大丈夫だと思うぜ……色んな意味で」
キノコ王国の王女、ピーチである。
ピーチはさらわれ慣れしているため、意外と肝が据わった一面がある。
こんな危険な世界でも、自分をしっかり保っていられるだろう……とマリオは思っていた。
「それでアス姉、どこから声が聞こえたの？」
「……」
カービィがアスティマに話しかけると、彼女は不快そうな表情になった。
あの事をまだ忘れられないからだろう。
「おい、アスティマ。そいつらはどこにいる？」
その代わりにピカチュウがアスティマに話しかけ、声の聴こえた場所を問う。
「青年の声は北、女性の声は南から聞こえました」
「そうか。なら、二手に分かれる必要があるな。
マリオ、リンク、カービィ、俺は南、ピット、パルテナ、ネス、リュカ、シュルクは北を頼む」
「わ、分かったよ」
「ネ、ネス君、その……一緒に頑張ろうね」

「うん」
「私達も一緒についていきますね。だって、子供達だけでは心配ですから♪」
パルテナがピット、ネス、リュカを見てウィンクする。
「それじゃあ、行ってくる!」
「いってらっしゃい。あなた達の行く手に、希望の光がありますように」
アスティマに見送られたスマブラ四天王は南へ、ピット達は北へ向かうのであった。

第５話　炎の紋章を掲げて

炎の紋章を掲げし剣士、マルス、ロイ、アイク、ルフレもまた、
この荒廃した世界に飛ばされてしまっていた。
「なんだ、この化け物は」
「まさか、ゾンビかな？　でも、この世界のものは見た事がないし……」
「とにかく、早めに片付けるぞ」
「了解！」
マルスがファルシオンを振るいゾンビ犬を斬りつけた後、ロイが蛆の塊を封印の剣で切り裂く。
蛆の塊が動くのを見て若干不快な気分になったが、
アイクは噴火で自分の周囲にいたゾンビ犬と蛆の塊を攻撃する。
「後方支援は任せて！　サンダー！」
ルフレの掛け声と共に蛆の塊に向かって雷を放ち、ダメージと共に麻痺させる。
「よし、相手の動きは止めたぞ！」
「う……」
蠢く蛆の塊を見てロイは若干不快な気分になるが、
蛆の塊は先ほどアイクが与えた技が効いたのか燃焼によるダメージを受ける。
「ぐっ」
一体のゾンビ犬がアイクに噛みついて怪我を負わせる。
「大丈夫かい、アイク！」
「ああ」
「ブレイザー！」
「居合い斬り！」
ロイとアイクが剣を振ってゾンビ犬と蛆の塊を切り裂く。
ゾンビ犬は死ぬ直前に内臓が飛び出したが、斬り合いに慣れている四人は平気だったようだ。
「エルウィンド！」

ルフレの風魔法が蛆の塊とゾンビ犬を切り刻むと、
蛆の塊は弾け飛んで死に、ゾンビ犬も吹っ飛ばされる。
その隙にマルスがゾンビ犬に突っ込んでシールドブレイカーを繰り出し、
アイクがとどめに叩き割りを繰り出すとゾンビ犬は倒れたのだった。
「よし、これで終わったな」
「……」
「どうしたんだい、ロイ」
灰色の空を見るロイに、マルスは声をかける。
「……なんか、暗いね……。太陽が、全然出ていない……」
「……ああ。まるで、あの時のようだ」
「あの時？」
アイクが言う「あの時」とは、彼の元いた世界で起きた戦争の終盤の事である。
数百年前に交わされた約束が破られた事で、
女神の裁きにより多くの人々が石化され、空も灰色に染まってしまったという。
「この世界のように魔物は現れなかったが……それでも、
さらに状況が過酷になった事は言うまでもない」
「だから、この世界から早く脱出しなくちゃね。……死ぬかも、しれないから」
「了解！」
その頃、ピット達は……。
「アスティマによれば、この辺に仲間がいるらしいのですが……」
「全然気配がしないね……。一体、どこにいるんだろう……」
この世界に散らばった仲間を探していたのだが、
その仲間の気配はなく、ただ瓦礫と死体が広がるのみだった。
「酷いよ……どうしてこうなったの？　どうして死ななきゃいけなかったの？」
リュカがこの惨状を見て驚きと悲しみの混じった声で呟く。

多くの別れを経験したリュカでさえ、この光景には心が耐えられないようだ。
そして、いつか自分のあの一員になってしまったら……と思うとリュカはさらに心が痛んだ。
「リュカ、まだ絶望というわけじゃないよ」
「ネス君？」
だが、そんなリュカを励ましたのは、ネスやシュルクなどの「仲間」だった。
「僕達が拠点にしている『ラストホープ』って、どういう意味だか分かるかい？」
「えっと……最後の、希望？」
「そう。希望はまだこの世界に残っている。
だから僕達は、それを守るためにも、この世界を生き抜かなきゃいけないんだ」
「だからリュカ、一人で抱え込まずにたまには仲間に頼ってくださいね。
あ、頼りすぎるのはいけませんよ？」
「……みんな、ありがとう……」
仲間の励ましの言葉を聞いたリュカの心の中に、小さな芽が出てきた気がした。
ネス達もまた、それが消えないようにリュカを守ってやる事にした。
「それで、どっちに行けばいいんだろう？」
「さあ……北も南も西も東も分からないし、その辺をうろうろしているしかないよね」
「仕方のない事だが、そうするしかあるまい」
「アイク……」
マルス、ロイ、アイク、ルフレが歩いていると、何人かの人影とすれ違った。
「誰だ？　生存者がいるのか？」
アイクがその人影に向かって走り出すと、

ネス、リュカ、シュルク、ピット、パルテナと出会った。
「あんたは……」
「あ、あなたはアイク……さん？　まさか……」
「俺を疑うのか？」
「えっと……その、好きな食べ物は？」
「肉だ」
「よかった……」
リュカは、彼が本物のアイクかどうか疑ったが、質問にちゃんと答えられたようで安心する。
「あ、もしかして君達もここに来たのかい？」
マルス、ロイ、ルフレも何とかアイクに追い付いたようだ。
「うん。変な生き物に襲われたけど、何とか追い払ったんだ」
「あ、それは僕達も同じだよ」
「お互い災難だったねぇ……」
「だねぇ……」
はぁ、とシュルクとロイは溜息をついた。
「とにかく、仲間と合流できてよかったね」
「さぁ、早くラストホープに戻……」
「待って！」
仲間と再会できて喜ぶ9人だったが、ふと、どこかから不気味な音が聞こえてくる。
それを聞いたルフレはいきなり大声を出した。
「ルフレ、どうしたの？」
「変な音が聞こえてくる……みんな、気を付けて」
「う、うん」
皆はルフレの指示通りにそれぞれの武器を構える。
不気味な音は徐々に大きくなっていき、やがてその音が止むと、突然空を突き破って何かが現れた。
それは、タールのような目と濁った鱗を持ち、巨大な牙が生えた魚の姿をした魔物だった。
「な、なんだこれは!?」

「まずいよ……」
　その魔物を見たルフレの表情に焦りが生じる。
「どこがまずいの、みんなで戦えば……」
「僕達はあの蛆や犬と戦って消耗している。だから、その状態で戦っても負ける。
　まずは拠点に戻って態勢を整え直そう」
「流石だな、ルフレの目に狂いはない。皆、ルフレの指示通りに撤退するぞ。
　ここで無駄死にするわけにはいかない」
「……わ、分かったよ！」
　名軍師と呼ばれるルフレの分析により、ネス達はひとまずその魔物から逃げる事にした。
　だが、その魔物が簡単に彼らを逃がしてくれるわけがなく、
　口から濁った水を吐いて攻撃してきた。
「反射盤！」
「サンダー！」
「ＰＫファイアー！」
「パルテナの神弓！」
　その水をルフレが雷魔法で打ち消しつつ、
　パルテナの反射盤で守られたネスやリュカ、ピットも飛び道具で牽制する。
　遠距離攻撃ができないマルス、ロイ、アイク、シュルクは、彼らに守られながら走り出した。
「下手に相手を刺激すると反撃を受ける。
　だから、相手の攻撃を打ち消す以外の攻撃はしないでくれ」
「はい！」
「僕達の目的は、あくまでも生き残る事だからね」
「はぁ、はぁ……ここまで来れば大丈夫かな？」
　ある程度走った後、その魔物の姿は跡形もなくなっていた。
「ああ。あいつが追ってくる事は、もうないだろう」
「……そう、だね。安心した……よ」

ロイはあの戦いと走りすぎたのが影響したか、疲労が限界に達して倒れてしまう。
「ロイ!?」
「死んではいないよ。疲れてるだけ。
ただ、自力では動けないみたいだから、誰かが運ぶしかないみたいだ」
「俺が運ぼう」
「頼むよ」
アイクは、倒れたロイを持ち上げると、彼の腕を肩に組ませて運んだ。
「……」
「アイク～、大丈夫だよね～？」
「ああ、これくらい軽い」
「やっと着いたぁ～～～～」
ピット達は、ようやくラストホープに着いた。
アイクはよっこらせとロイをアスティマの目の前に降ろす。
「お疲れ様です。これで集まった仲間は9人ですね」
「マリオ達やこれから来るピーチ達も入れれば、１４人以上になるよ」
そう、これでこのラストホープに集まった仲間は全体のおよそ1／4になる。
「それにしてもこの子、かなりお疲れのようですね。
私の術で、何とかするしかありませんね……」
アスティマが杖を振ると、倒れていたロイに光の粒子が降り注ぎ、
それがロイを包み込むと彼はゆっくりと起き上がった。
「ん……っ、ここは？」
「お疲れ様です。ここは、ラストホープですよ」
「ラストホープ？　という事は……」
「ええ、無事に帰ってきたのですよ」
「や……やったぁ!!」
無事に拠点に辿り着けた事で喜ぶロイ。
「僕、生きてるんだよね？　ね？」

「え、ええ……もちろん生きていますよ？」
「うんうん、それだけで十分だよ。
　ああ、死んでいなくてよかった……忘れられてなくてよかった……」
「えっ、どういう意味ですか？」
　ロイの発言にアスティマは驚いた。
　実は彼、若干天然ボケなところがあるのだ。
「ロイはＤＸで初登場しましたがＸで消え、
　Ｆｏｒで色変え同名キャラも出ましたがＤＬＣで復活したのですよ」
「あら、そうですか」
　パルテナのメタ発言を聞いたアスティマはすぐに納得したようだ。
「さて、残るはマリオさまやリンクさま、カービィさまやピカチュウさまだけですね」
「ええ、彼らはピーチ達を助けに向かっているところでしょう」
「でも、あんな化け物を見て大丈夫なのかな？」
「多分大丈夫だと思います……多分」
「……多分っていうのがちょっと不安だけど……じゃあ、とりあえず待つ事にしよう」

第6話　荒地に咲く華

そして、南に向かったスマブラ四天王はというと。
「ピーチ、どうか無事でいてくれ」
女性陣を探すために走っていた。
「マリオ、ピーチの事が心配なのか？」
「ああ。いくらピーチが精神的に強いと言っても、ずっとこの状況で持つかどうかは分からない。
だから、早めに助け出さなきゃな。これでもう、何回目だろうな……」
ピーチは何度も攫われた事で有名である。
そして、マリオはそんなピーチを何度も助けた事で有名である。
それが起こりすぎて、最早何度行われたのか、マリオもピーチも覚えていないようだ。
「他にもピーチと一緒に戦ってる奴と言えば」
「ゼルダ、だな」
リンクにとってゼルダは最も大事な人物であり、それはマリオに対するピーチのようなものだ。
「ゼルダ、絶対に無事でいろよ。死んだら、承知しないからな……！」
「あの～、僕と」
「俺はまだセリフがないんだが……」
いつの間にか忘れられたカービィとピカチュウが、ぽつりとそう呟いた。
その頃……。
「サムス、頼むわよ」
「ええ」
スマブラメンバーの女性陣は、ゾンビやゾンビ犬と戦っていた。
怪物との戦いに慣れているサムスを前に立たせ、
ピーチ、ゼルダ、ロゼッタは後方からサムスを援護する態勢に入っている。
「それっ！」

ピーチがどこからか野菜を引っこ抜いてゾンビに投げつける。
荒れ地でも野菜を引っこ抜けるのは、ピーチが強い魔力を持っているからだ。
さらに、ゼルダのディンの炎がゾンビを焼き尽くして灰にする。
「不死者には火や光が良く効くとはいえ、まさか一発で倒せるとはな」
「ロゼッタさん、私にこんな強い魔力が宿っているなんて……思っていませんでした」
「これでどう？」
サムスがミサイルをゾンビ達に放ち、次々と爆発してゾンビを吹き飛ばす。
さらにロゼッタのチコシュートがゾンビ犬にクリーンヒットして大ダメージを与える。
ゾンビとゾンビ犬は反撃とばかりにピーチに噛みつき、
攻撃と同時に彼女のドレスを食いちぎった。
「きゃぁぁぁぁ！　私のドレスがぁぁぁ！　よくもやったわねぇぇぇぇ!!」
しかし、それでスイッチが入ったピーチは、フライパンを取り出し、ゾンビとゾンビ犬に振り下ろす。
その一撃を受けたゾンビ犬は倒れ、ゾンビも怯む。
「ゼルダ！　サムス！　ロゼッタ！　とっととこいつらを倒すわよ！」
凄みのある表情のピーチの怒声を聞いたゼルダ、サムス、ロゼッタは無言で頷いた。
スマブラメンバーの中で最も怒ると怖い人物、それがピーチなのである。
「な、なんだか必死な様子でしたね、ピーチ姫は」
「それだけ大事なものって事なのよ……」
そんなピーチの様子に引きつつも、ゼルダのファントムアタック、サムスの体術、
ロゼッタのギャラクシースマッシュでゾンビとゾンビ犬は全滅した。

「はぁ、はぁ、はぁ……ようやく全部倒せたわ」
　ピーチはフライパンを構えながら荒い息を立てる。
「思い知ったかしら？　ドレスの恨み」
「も、もういいでしょう？　それよりも、皆さんと合流するのが先ですよ」
「あらそうでしたわ。じゃあ行きますわよ！」
　ピーチを先頭に、ゼルダ、サムス、ロゼッタは歩いていった……が、数分歩いて立ち止まった。
「……どこに、マリオがいるの？」
「あ～……。ここは東西南北が見当たらないから、すぐに迷ってしまうのよね」
「ロゼッタさん、貴方の超能力で何とかならないのですか？」
「コンパス代わりにするのだな？　……まぁ、構わないのだが……」
　そう言うと、ロゼッタは精神を集中させた。
「北はこっちだ」
　どうやら、ロゼッタが向いている方向が、この世界での「北」らしい。
「では、これを参考にすれば、仲間が見つかるのですね」
「そういう事だ」
　ロゼッタの導きに従い、ピーチ達が歩いていると、遠くに四つの人影が見えた。
「あっ、あれは！　もしかしてマリオじゃない？」
「リンクの姿も見えますね……行きましょう」
　ピーチ達がその人影に向かって歩くと、無事にスマブラ四天王と出会った。
「マリオ！」
「リンク！」
「「無事でしたか！」」
　ピーチとゼルダ、二人の姫がそれぞれの大切な人のところに行く。
「ああ、俺達は大丈夫だぜ」
「でもピーチ、なんでドレスが破けてるんだ？」

「言わないで……。とにかく、休める場所に行って休みましょう」
「これ以上戦うのはきついからね」
「わ、分かったよ」
スマブラ四天王と合流したピーチ、ゼルダ、サムス、ロゼッタは、ゾンビや蛆の塊と出会いながらもそれを軽くあしらった。
そして、ラストホープに到着した時は、既にマルス達が戻ってきていた頃だった。
「お帰りなさい、皆様」
「ただいま～！　それよりも早く、このドレスを直してちょうだい！」
ピーチは真っ先にアスティマがいるところへと向かった。
アスティマはピーチの言葉に頷いて杖をピーチのドレスに向け、光を放つ。
すると、破れたピーチのドレスは、見る見るうちに元に戻った。
「ありがとう！　あなたにこんな不思議な力があるなんて信じられないわ！」
「お前だって十分不思議じゃないか」
ピーチの言葉に突っ込みを入れるピカチュウ。
「それよりも、この方は一体誰なのですか？」
「彼女はアスティマといって、このラストホープを治めているんだ」
「私はピーチ・トードストゥールよ」
「ゼルダです」
「私はサムス・アラン」
「ロゼッタだ」
「よろしくお願いしますね」
アスティマは自己紹介をしたピーチ達に向けてお辞儀した。
「随分と上品なのね、アスティマって」
「親近感が沸くな、チコ」
「ぴぃぴぃ」
気品に溢れるアスティマの容姿と仕草に、ロゼッタは親近感を抱いたようだ。
ピーチとゼルダも彼女なら信頼できそうだと頷く。

「ねえねえアス姉ー、次の仲間はどこなの？　テレパシーで探してよー」
「……あ、あの、精神集中を何度も使いましたし、もう使う力は残っていませんよ……」
「えー、それじゃあ仲間が探せないじゃない！　お願い、探してー！」
駄々をこねるカービィを、ゼルダはひょいと持ち上げた。
「カービィさん、彼女に無理はさせないでください」
「やだやだ～お願い～離して～！」
「アスティマさん、ゆっくり休んでくださいね。私達も後でゆっくり休みますから」
「ええ。おやすみなさい」
そう言い、アスティマは杖を振り下ろして夜の帳を作り出した。
夜の帳が作られた後でゼルダはカービィを下す。
「……というわけですので、仲間探しは明日にしましょう」
「でも、僕はみんなが心配で……」
「確かにこの危険な世界では、このラストホープ以外では生き残れないでしょう。
ですが、無理に外に出て体力を切らし、全滅するよりはマシでしょう？」
「……だけど」
「困っている人を助けるのはいい事です。
ですが、結果的に自分の命を失えば、もう二度と美味しいものが食べられなくなり、
自らの手で仲間を助ける事はできなくなります。
それでも、カービィさんは外に出るのですか？」
「そ、そんなの嫌だ！　嫌だよぉ!!
生きて美味しいものもっと食べたいし、みんなでわいわい騒ぎたいよぉ!!」
ゼルダの説得を聞いたカービィは、ようやく納得したようで落ち着く。
「……ですので、今日はゆっくり休みましょうね」

「分かったよ……」
カービィは、ぐっすり眠っているリンクとピカチュウの間に入り、眠りにつくのだった。
「……ふふ、カービィさんは本当に素直で分かりやすい子ですね」
そして、ゼルダもまた、眠りにつくのであった。

第7話　宇宙を翔ける者

「まさかこんな世界に来て、こんな化け物と戦うなんてな……」
「ちぃっ……俺達は二人だけなのに、うじゃうじゃいやがるぜ」
フォックスとファルコは、巨大な蜘蛛や鴉と戦っていた。
だが、数は多く、とても二人では捌き切れない量だ。
ブラスターなどで何とか撃ち抜いてはいるものの、数はまだ減っていないようだ。
「そういえば、ウルフともはぐれてしまったようだ」
「ウルフ？　あぁ、あいつなら一人で何とかやってるだろ。俺達は俺達でできる事をやろうぜ」
「そうだな、ファルコ。行くぞ」
フォックスのブラスターが鴉を撃ち抜き、墜落した後にファルコがウイングエッジで攻撃する。
すると二体の巨大蜘蛛がフォックスに糸を吐いて彼の動きを制限した。
「うわっ！」
「大丈夫か、フォックス！」
「くそっ、なかなか動けない！」
蜘蛛の大きさのせいか、吐いた糸も大きく、振りほどこうにもなかなか振りほどけなかった。
その間に他の巨大蜘蛛や鴉がフォックスを襲うが、フォックスは全ての攻撃を何とか回避した。
フォックスとファルコはこの状況を打開するべく、
ファイアフォックスとファイアバードを使い、巨大蜘蛛を一体撃破する。
「ようやく一体減らせたか」
「ったく、手間がかかるぜ。とっととくたばれ！」
そう言ってファルコは鴉をブラスターで撃つ。
怯んだ鴉に対しフォックスはファイアフォックスで攻撃して倒し、
続けてファルコも巨大蜘蛛をファイアバードで焼き尽くした。

「はぁっ……この世界でダメージを受けたら、『本当に』傷がついてしまうようだな」
フォックスの言う通り、この世界では争いの世界にはない「生死」が存在するようで、
文字通りやらなければやられる世界である。
二人は争いの世界でいくら乱闘が行われても大怪我を負わない事の
ありがたみを思い知らされていた。
「それに、腹も減ってきたぜ……」
「なら、そこに焼き鴉と焼き蜘蛛が」
「誰が食うかよ」
もしもこのまま食事を採れなければ、フォックスとファルコは空腹によって餓死してしまう。
そうなるのを避けるために、早くこの魔物を倒さなければならない。
だが、多くの敵を相手にすれば、消耗が激しくなってしまうため、時には逃げる事も必要だ。
そう判断したフォックスとファルコは、この魔物から逃げ出そうとした。
「追ってきたぞ！」
「しまった、逃げ道を塞がれた！」
しかし、魔物から逃げようにも逃がしてくれるはずがなかった。
巨大蜘蛛と鴉は素早い動きで逃げ道を塞ぎ、フォックスとファルコの逃走を阻止する。
「くそっ、どうすればいい……」
「……こうなったら」
ファルコは、フォックスを庇うかのように彼の目の前に立った。
「どうした？」
「ここは俺が引き受ける！　お前は先に逃げろ！」
「ファルコ!?」
普段は乱暴で口が悪いファルコだが、実は仲間意識と自己犠牲心が

非常に強いのだ。
「今は一人でも生き残るのが先だ！　だから、お前だけでも生き残れ！」
「だがファルコ、お前がいなくなれば……」
「いいから逃げろ!!　このまま二人ともくたばったら元も子もない!!」
　ファルコの必死な様子を見たフォックスは頷き、「分かった」と言ってその場を後にした。
「フォックス……お前は絶対に生き残らせてやる。何故なら……俺の『仲間』だからな!!」
「……!!」
　突然、アスティマは何かを感じ取ったようで、むくりと起き上がる。
　そして何も言わず、ラストホープを立ち去ろうとした時だった。
「……どうしたの、アスティマ？」
　サムスも起きたようでアスティマのところに行く。
「あ、サムスさま……何か、嫌な予感がしたので、外に出ようと思いましたが……」
「貴方はラストホープを守る立場なんでしょ？　ここは、私が行ってくるわ」
　アスティマがラストホープからいなくなるのは非常に危険な状況になると判断したサムスは、
　自分が代わりに行く事にした。
「あら、そうでしたね。早とちりしそうでした。……では、いってらっしゃい」
「大丈夫よ、必ず生きて帰ってくる」
　そう言い、サムスはラストホープを立ち去った。
「……しかし、嫌な予感と言っても、東西南北がないし、探すのには骨が折れそうだわ」
　サムスが辺りを見渡していると、どこからか足音が聞こえてきた。
「この足音は……何？」
　彼女がその足音の方に向かって走ると、フォックスに出会った。

「フォックスじゃない！　どうしたの？」
「ああ、実はかくかくしかじかでな……」
　フォックスがサムスに事情を話すと、サムスはうーんと頭を捻ってこう言った。
「ファルコ、自己犠牲はいいんだけどこっちの事も考えなさいよね……」
「俺を守るためとはいえ、もしも死んだら二度と俺を守れなくなるんだぞ？」
「だから、私達でファルコを助けなきゃいけない」
「そうと考えたら、すぐに行くぞ！」
「ええ！」
　そう言って、サムスとフォックスはファルコを助けるために走り出した。
　その頃、ファルコは……。
「はぁ、はぁ、はぁっ……」
　巨大蜘蛛や鴉と戦い続けていたが、数は一向に減らず、傷ついてばかりいた。
　このまま戦闘を続けていけばいずれファルコは力尽きてしまうだろうがそれでも彼は退かない。
「俺はフォックスさえ守れれば、この命が尽きても……」
　そう言い、ファルコがブラスターの引き金を引こうとした、その時だった。
「「ファルコ!!」」
　突然、向こうから男女の声が聞こえてきた。
　誰だ、とファルコが身構えると、フォックスとサムスがやって来た。
「今、助けに来たぞ！」
「フォックス！　それにサムスまで！　何故、ここが分かったんだ！」
「アスティマって人に教えてもらったのよ、何か嫌な予感がするって」
「それに、お前が死んだら、俺も死んだも同然の状態になる！
　お前は本当に、死んでもいいのか!?」
　フォックスはいつもよりきつい言葉を吐くが、それはファルコのた

めを思っての言葉である。
自分とファルコ、そして多くの仲間がいてこそのスターフォックス、
そしてスマブラメンバーだとフォックスは思っているのだから。
「フン、俺はそんなに軟じゃねぇんだけどな。だが、それもまた悪くない道だな！
……手伝えよ、フォックス！」
「まったく、ファルコは素直じゃないな！」
「……行くわよ！」
フォックス、ファルコ、サムスはそれぞれの武器を構え、戦闘に臨んだ。

第８話　生き残るために

サムス、フォックス、ファルコは、残りの敵を倒すために戦っていた。
サムスはミサイルを放って広範囲の敵を攻撃し、
フォックスとファルコは炎を纏った突進で巨大蜘蛛を攻撃する。
巨大蜘蛛も反撃としてサムスとフォックスに糸を吐いて動きを制限する。
「こいつ、巨大だから糸も大きいのね。かなり厄介な敵なのは間違いない。
フォックス、ファルコ、私が一発放つから時間稼ぎを頼むわよ！」
「了解！」
フォックスとファルコが鴉にブラスターを放ち、
時間稼ぎをしている中でサムスはエネルギーを溜めていく。
その間に巨大蜘蛛や鴉が襲ってくるがフォックスやファルコが体術で攻撃する。
しばらくして最大チャージが完了すると、サムスはアイコンタクトで合図を送り、
フォックスとファルコは頷いた。
「チャージショット！」
そしてサムスのエネルギー弾が巨大蜘蛛に命中すると、巨大蜘蛛は跡形もなく分解された。
その勢いで巨大蜘蛛の糸から解放されたサムスは巨大蜘蛛にジャンプしてボムを置き、
爆発と同時にジャンプして巨大蜘蛛の反撃を避ける。
「ファイアー！」
さらに、フォックスが炎を纏った体当たりを繰り出し、巨大蜘蛛を攻撃する。
巨大蜘蛛は再びサムスに向かって糸を吐いて動きを止め、
鴉がフォックスに向かって突っ込んでいく。
「ぐぅっ！」

「フォックス！」
「これくらい平気だ、とりゃあっ！」
フォックスが鴉をブラスターで撃ち抜いた後、
すぐさま巨大蜘蛛に向かって走り、飛び蹴りを繰り出す。
さらにサムスとファルコの体術が巨大蜘蛛を捉えて吹き飛ばす。
そして、残りの巨大蜘蛛をサムスがアイスビームで凍らせた後、
とどめにチャージショットを放って巨大蜘蛛を四散させた。
「……っはぁ」
「だから、一人で無茶をするなと言っただろ？」
「そうだな……仲間ってのは、やっぱり大事だな。こんな事をした俺にも優しいんだからな……」
フォックスとファルコは、改めて仲間が大事だという事を知ったようだ。
サムスは「やれやれ」といった感じで二人を見ている。
「それはいいけど、ラストホープに戻るんじゃなかったの？」
「「あ」」
「そうだった……腹も減ったし、傷はついたし、体を休めるしかなさそうだな……」
「万全の状態にしないと、こんな過酷な環境ではまず生き残れないわよ？」
サムスの言う通り、ここは非常に危険な世界だ。
町や施設のほとんどは残骸としてしかなく、
また、争いの世界には普通にある食料や日用品も、この世界ではとても貴重な品だ。
「ったく、とにかく帰ればいいんだろ、帰れば」
「まぁ、そうだけど……」
体力を節約するため、サムス、フォックス、ファルコはゆっくり歩いていった。
すると、途中でなんと干し肉を見つけた。
「こ、これは……？」
「食料？」

この世界では貴重な食料であるため、フォックスとファルコはそれに手を伸ばした。
「待って！　声が聞こえるわ！」
「!?」
だが、その直前でサムスが止めた。
誰かの声を、サムスはここで聞いたからだ。
「……れだ、それを取ろうとするのは……」
しばらくして、向こうから痩せこけた男がやって来た。
「これは、お前のものだったのか？」
「そ、うだ……お、れが、生きる、ための……」
「俺達も今、腹が減っているんだ」
「だからその食料を少し分けてくれない？」
「だ、めだ……絶対に、渡さ、ん……。これは、全て、俺の、ものだ……」
サムスとフォックスは男と交渉して、食料を分けてもらおうとする。
だが、男はそれに応じる事はなく、干し肉を独り占めするかのように手で覆う。
「ならば……」
「やめろ！」
思わず力ずくで干し肉を取ろうとするファルコだが、フォックスが制止する。
「こいつだって、俺達と同じで、この世界を必死で生きようとしている。
そんな奴から、生きるための希望を奪おうとするなんて、非道な事だと思わないか？」
「……」
この男が善人か悪人かどうかは分からないが、今はそんな事は関係ないと主張するフォックス。
「でもよ、ここはやらなきゃやられる世界なんだぜ？　時には甘さを捨てなきゃいけないんだぞ」
「だが……」

「その鳥の言う通りだ。ここは、弱肉強食。弱い者は、死に、絶え、強い者のみが生き残る。
俺、のような、奴は、すぐ、に、死ぬ……」
男は今にも死にそうな様子でそう言った。
「貴方、まさか……」
「こんな風に！　こんな風に！
必死に生きたいと思った奴が、こんな風に無残に死ぬ世界なんだよぉ!!」
そして、最後に必死に「生」にすがりつくように喉から言葉を絞り出した後、男は息絶えた。
「「……」」
目の前で人の死を見てしまったフォックスとファルコは、
ショックのあまり言葉を出せないでいた。
そんな二人を、サムスは優しく宥める。
「……そんなに落ち込まないで、二人とも。
私達にできる事は、彼が残した希望を、決して絶やさない事なのよ」
「サムス……」
「この干し肉は、ありがたく頂戴しましょう。彼が安らかに眠れる事を願って」
「……ああ」
落ち込みながらも、フォックスは男が遺した干し肉を貰うのだった。
干し肉を食べて腹を満たしながら、フォックスは思う。
（もしも俺がこの男の立場だったら、俺は一体、何をしていたんだろう。
自分が生き残るために食糧を独占したか。他の人を生かすために食糧を与えたか。
それは正しくもなく、間違ってもいない。
ただ、いずれを選んだとしても、二度と戻らない何かが犠牲になる……。
……そんな、世界は、もう嫌だ。早く、平和な世界に戻りたい……。

だが、それではここを見捨てるという事に……）
「フォックス、何ぼーっとしてるんだよ」
「はっ！　ファルコ、すまない。考え事をしていたんだ」
しばらくぼんやりしていたフォックスだったが、ファルコに声を掛けられて我に返った。
「……早くラストホープに戻ろうぜ。温かい日常が、欲しいんだろ？」
「……そうだな」
「……行きましょう」
サムス、フォックス、ファルコは、ラストホープに戻るために歩いていった。
だが、その背後で、何者かが見ていた事を、彼らは知る由はなかった……。

第9話　邪悪なる敵

「……ふふふ」
どこかの暗い空間の中で、女性が微笑んでいた。
「順調だねぇ。みんな散らばっているみたいだよ」
女性は光のない瞳でじっとどこかを見つめていた。
しばらくして、女性が無表情になる。
「このまま散らばっていた方が、ボクとしては好都合なんだよね。
でも、どんどん集まってきている。……これは少しばかり、お仕置きが必要かな？」
そう言うと、女性は右手に黒いエネルギーを作り出し、空間のどこかに向かって投げつけた。
「さぁ、行っておいで！　ボクの可愛いペットよ！　希望に縋る者達を無残にも食らうんだ！」
その頃……。
「じゃ、そろそろ仲間を探しに行こうぜ」
「うん！」
マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウはアスティマの導きに従って仲間を探しに行っていた。
「アスティマによれば、ここから真っ直ぐ進めばフォックス達と合流できるらしい」
「でも、また魔物に襲われたらどうしよう……」
「安心しろカービィ、魔物が襲ってきても俺達が守ってやるよ」
「ありがとう！」
リンクが前方を慎重に調べた事により、
スマブラ四天王は魔物と出会う事なく先に進む事ができた。
「この道を進めば、魔物は出てこないみたいだ」
「おぉ～、リン兄やるぅ！」
「へっ、伊達に色んなところを冒険してないさ」
スマブラ四天王が通ったこの道は、
多少遠回りになるが魔物は出てこないようで余計な消耗はせずに

済む。
　多少時間がかかっても、無事な状態で仲間と合流する事を優先しているからだ。
「とにかく、肝心の仲間はどこにいるんだろう？　う～ん、本当に見つかるのかなぁ……」
「悩んでる暇があったらまず走れ！」
「……ちょっと強引だけど、そうだよね！」
　どこかで聞いたようなマリオの言葉通り、仲間を探すためにスマブラ四天王は走り出す。
　この先にいると思われる、仲間を探すために。
　スマブラ四天王がしばらく走って数分後。
　彼らの目の前に、フォックス、ファルコ、サムスの姿が見えた。
「あれは……」
「フォックスに、ファルコに、サムス!?」
「今、行くぞ！」
　スマブラ四天王が三人のところに行こうとした次の瞬間。
「!?」
　突然、地中から、不気味な音と共にスマブラ四天王の目の前に魔物が現れた。
　その魔物は、両手が鎌のようになっており、
　緑と黒の斑模様をしていて、口には大きな牙が生えていた。
「な、なんだこれは!?」
「知らないよ！　こんなの、僕の世界にはいなかった！」
「それは俺だって同じだ！」
「くっ、やるしかないのか!?」
　魔物は、まるでここを通さないかのようにスマブラ四天王に対し激しい敵意を向けている。
　先に進むためにはこの魔物を倒すしかないようだ。
　覚悟を決めたスマブラ四天王は、その魔物と戦う事にした。
「ファイアボール！」
「てやあっ！」

まず、マリオがファイアボールで牽制し、リンクが剣で魔物を斬りつける。
魔物は口から自分の小型版と言える分身を吐き出したが、
カービィがそれを吸い込んで吐き出してダメージを与える。
しかし、それが魔物の顔に当たったために魔物は怒り、カービィに体当たりを繰り出す。
「うわぁぁぁぁっ！」
「カービィ！」
体当たりで吹っ飛ばされたカービィをピカチュウが受け止める。
「お前にも手痛い一撃、食らわせてやるぜ！」
そう言ってピカチュウは電撃を飛ばして魔物を攻撃し、麻痺させる。
魔物が動けなくなったところにリンクとカービィの斬撃が命中した。
「やるな、ピカチュウ」
「お前らに後れは取らねぇよ」
ピカチュウの麻痺がまだ効いているのか魔物はまともに動けず、
スマブラ四天王はそれを見逃さずさらなる追撃を加える。
しかし、攻撃を食らい続けた魔物は自己再生を使って体力を回復し、
さらに体の痺れをある程度取った。
そしてマリオに鎌を振りかざして切り裂こうとするがマリオがそれを受け止める。
「えいっ！」
カービィがファイナルカッターで魔物を切り裂いたのはいいものの、
その後の攻撃は全てかわされてしまった。
「ちっ、しぶとい奴め」
「だったらこれでどうだ！」
リンクの勇者の弓で魔物の動きを一瞬止めた後、
カービィがストーンで押し潰しダメージを与える。

魔物も無数の分身を呼び出して攻撃するが、
マリオがマント、リンクが盾で全て弾いたため被害はなかった。
が、その後に飛んできた鎌攻撃は避けられず、リンクはダメージを受けてしまう。
幸い、鎖帷子で守られていたため大した傷ではなかったが。
「魔物も本気出したって事だな」
「そうみたいだね……」
「これは、俺達も本気を出さなきゃな！」
「ああ！」
これでスマブラ四天王の士気が一気に上昇、マリオはファイア掌底、リンクはスマッシュ斬り、
カービィはスマッシュキック、ピカチュウはショートでんげきを叩き込んだ。
魔物もピカチュウの電撃が効いて動けない。
このチャンスを、今のスマブラ四天王が逃さないはずがなかった。
「カービィ！」
「うん！」
カービィは、マリオが放ったファイアボールを吸い込んでファイアをコピーする。
「これで……とどめだぁぁぁぁぁぁぁ!!」
そして、ファイアカービィが口から吐いた火炎が魔物を包み込んで焼き尽くし、
その魔物を跡形もなく消し去った。
「まったく、しぶとい奴だったぜ」
「でも、これでフォックス達に会えるんだね」
「そうだな」
「なら、早く合流するぞ！」
謎の魔物を倒したスマブラ四天王は、ようやくフォックス、ファルコ、サムスと合流した。
「どうした？　随分疲れているじゃないか」
「ああ、実はな……」

マリオは、先ほど自分達が謎の魔物と戦っていた事を三人に話した。
「変ね……そんな魔物、この世界にはいないはずなんだけど……」
それを聞いたサムスは首を傾げる。
「サムス、もしかしたら俺達が出会ってないだけで、他の奴らは出会ってるのかもしれない」
「その可能性もなくはないわね」
「ま、仮に出会ったとしても、俺達が蹴散らしてやるから心配はするなよ！」
「……そうね」
「じゃあ、早くラストホープに戻ろうぜ！」
こうして、フォックス達と合流したスマブラ四天王は、ラストホープに戻っていった。
しかし……。
「……ペットの反応が感じられない。どうやら、敗れてしまったみたいだね……。
……まぁ、所詮は捨て駒、といったところか。
みんながバラバラになっていれば、ボクとしては満足なんだから、気にしないでおこうっと」
暗い空間の中で、女性はそう呟いていた。

第１０話　希望を目指して

ヨッシー、メタナイト、りょうは、元いた争いの世界の空中スタジアムから、
瓦礫が広がる大地へと飛ばされてしまっていた。
「う～、暗いし空気が悪い～……。全然、スローライフが楽しめないよ」
この世界を見てりょうの気分が悪くなる。
空には太陽が照っておらず、虫や魚もほとんどおらず、いたとしても死骸や異形が大半だ。
こんなところでは全くスローライフが楽しめないのも伺える。
「りょうさん、私達だってそれは辛いですよ。
でも、脱出する手段がまだ見つかっていない以上、ここで過ごしていくしかないようです」
「はぁ、やっぱりそうかぁ……」
「水もなければ食糧もない。故に、ここで無駄に消耗すれば死に繋がる」
「えっ？」
りょうは、メタナイトのその言葉が信じられなかった。
この世界で力尽きたら、本当に死ぬ？
フィギュアに戻るのではなく？
それは争いの世界でも、ましてや自分の故郷でもあり得ないはずだ。
「どういう事……？」
「メタナイトさんはこういうのに敏感なんですよ」
「りょう、辺りを見渡してみろ」
「えっ？」
メタナイトに言われたりょうが辺りを見渡しながら歩いていくと、
「腹、減った……」
「この水は誰にもあげないんだから……」
「痛いよぉ……」

空腹の人間、飲み水を独り占めしている人間、全身が傷ついた人間が、
苦しそうな表情で歩き回っていた。
ところどころがちぎられた人の死体もあり、恐らくは誰かに「食われた」ものであろう。
「な、何これ……!!」
この光景を見たりょうが絶句する。
「……ごく僅かな水や食糧を奪い合い、食糧がなければ他人を食べている」
「うわぁぁぁ……嫌だよぉ……」
「りょうさん……」
耐えられなくなったりょうは頭を抱えて蹲る。
ふと、彼らの周りにいた人間の一人が、ふらふらと近付いてきた。
「肉を……よこせ……」
「わ、私は肉なんて持ってませんよ!」
「その肉ではない、お前の肉だぁぁぁぁぁぁぁ!」
人間は荒れ狂いながらりょう達に襲い掛かった。
やるしかないのか、とヨッシー達は戦闘態勢を取った。
「しばらく寝ているんだな」
ヨッシー達はその人間を殺さないよう、手加減しながら攻撃していった。
結果、2分程度でその人間は気絶した。
「メタナイトさん、容赦がないんですね」
「ここではやらなければやられる、それだけだ」
「……今は、メタナイトの言う通りにしよう」
襲い掛かってくるゾンビや鴉を蹴散らしながら先に進んでいくと、
水が入っている小さな瓶を見つけた。
「あっ、これは……水ですか?」
中身を確認してみると、水は少し濁っていたがまだ飲めそうだった。
「う~ん、飲んでも大丈夫なんですかねぇ?」

「まぁ、ヨッシーの胃袋なら、ね……」
ヨッシーならこれを飲んでも平気かもしれないが、
メタナイトやりょうが飲むには聊か不安が残る。
それでも、無いよりはマシと思ったので、りょうはそれを拾って懐にしまった。
「水は手に入ったが、この質と量では心許ない。
このまま飢え死にする前に、早く休めるところに行かねばならない」
「でも、本当にそこは見つかるの？　こんなところに、休める場所はあったっけ？」
「だからこそ『希望』を探すんですよ」
絶望という闇の中にある、一筋の光、希望。
彼らは僅かな望みをかけて、その希望を探しているのだ。
ヨッシー、メタナイト、りょうが、この世界にある希望を探している頃。
ラストホープでは、アスティマが杖を構えて精神集中をしていた。
―絶望の中にも、希望はあるんだ。
―そう思っていなければ、生き残れません。
―ここに私達を導いてくれる人はいない。
―自由と言えば聞こえはいいけど、実際は……。
―完全に、私達自身で判断するしかありませんね。
「聞こえる……。ここを目指す者の声が……」
「ん？　どうしたんだ、アスティマ」
マリオがアスティマに声をかけるが、彼女の耳には入らなかった。
「……!!」
しかし、彼女の頭の中である音が聞こえた途端、彼女は精神集中を終えて杖を下した。
「……ああ、申し訳ありません、マリオさま。人の声と魔の声が聞こえてきたもので……」
「人の声？　魔の声？」
「前者はこの世界にやって来た者、後者は……」

「そいつらを襲う化け物、ってとこだな？」
　はい、とアスティマは頷く。
「よぉし、だったら俺達で蹴散らしてやろうぜ！」
「待ってください、リンクさま」
　ラストホープを出ようとするリンクだが、アスティマがそれを制止する。
「今回はあなた達が行く必要はないと思います」
「なんでだよ」
「私は、彼らを信じていますから」
　その頃、ヨッシー達はというと。
「こっちの方に、何か足跡があるよ」
　りょうが立ち止まって地面の足跡を指差していた。
「あ、本当です」
「誰の足跡だろうか……」
　ヨッシーとメタナイトは、りょうが見つけた足跡をじっと観察していた。
「どうやら、その足跡は3人のもののようで、ブーツを履いているのが2人のようだ」
「おお～！」
　メタナイトが足跡を見て誰のものかをある程度予測した。
「ブーツを履いているのはたくさんいるから、
　誰なのかは分からないけど……とにかく、こっちに希望があるのかな？」
「そうですね～。行ってみましょうか」
「無論、警戒は怠るなよ」
　ヨッシー、メタナイト、りょうは、
　敵や飢えた人に襲われないように辺りを警戒しながら歩いていった。
　その時だった。
「なっ、何……!?」
　ブォンという不気味な音と共に、3人の目の前に、長い首が4つあ

る巨大な亀が現れた。
「くっ、敵襲か!?」
「戦いは、避けられないのですか……!?」
大急ぎでヨッシー、メタナイト、りょうは戦闘態勢を取った。

第11話　四つ首の亀

「うりゃりゃりゃりゃ！」
　メタナイトが亀に突っ込んでいき、剣を振り連続で斬りつける。
「それっ！」
「やあっ！」
　ヨッシーとりょうは彼を援護するように卵やボウリングの玉を投げて攻撃する。
「うわぁ！」
　亀は首を伸ばしてヨッシーに噛みついてきた。
　その一撃はかなりのようでヨッシーは体力を多く持っていかれる。
「顎の力が強いですねっ、この亀は」
「だが顎の力だけではない、首も長いぞ」
「それは……うわっ！」
　亀の頭の1つが首を伸ばし、ヨッシーを巻きつけて宙に持ち上げ、地面に叩きつける。
「いたた……気を付けなければいけませんね。でも、私もやられてばかりではありませんよ！」
　ヨッシーは高くジャンプした後、亀の頭の1つを蹴ってダメージを与える。
「ここから……えいっ！」
　りょうは自分に風船を付けて飛び上がった後、亀の上空から植木鉢を落とす。
「うりゃっ！」
　メタナイトは剣を構え、きりもみ回転しながら亀に突っ込んでいき亀の傷を抉る。
　さらに着地した際の隙を軽減して飛び上がって斬りつける。
「うわぁ～、メタナイトかっこいい～」
「見惚れる暇があるならば早めに片付けろ」
「そうだね！　……ってメタナイト!?」
「くっ、油断したか！」

だがメタナイトは先ほどの攻撃の隙は軽減できず亀の体当たり攻撃を許してしまう。
「危ない、メタナイト！」
「すまな……ぐあぁぁぁぁ!!」
りょうが素早く亀に近づいて花火で攻撃したが、
亀の勢いを殺す事はできずメタナイトは大ダメージを受けて吹っ飛ばされた。
「く……っ」
何とか体勢を整えたメタナイトだが、体重の軽い彼にとっては致命傷である。
ヨッシーとりょうは、彼を守るために前に立った。
「メタナイトさん、ここは私達に任せてください」
「あまり無茶はしないでね」
「……む、無論」
ヨッシー、メタナイト、りょうと亀の戦いは続く。
「はぁっ！」
メタナイトがヒット&アウェイ戦法で亀を斬りつけつつ、
ヨッシーとりょうが遠距離から卵やパチンコで援護する。
少しずつだが、亀に確実なダメージを与えられているようで動きが鈍ってきている。
ヨッシーとりょうは、亀の攻撃がギリギリ届かない位置から遠距離攻撃を行い、
飛び道具がないメタナイトは近づいては斬り、近づいては斬りを繰り返す。
「もう少しで亀を倒せますよ～」
「おお！」
「よし、一気に決めるぞ！　ヨッシー、まずは卵を投げて敵の注意を逸らせ」
「はい～！」
ヨッシーはメタナイトの指示で亀に向かって卵をたくさん投げる。
メタナイトはその隙に亀の懐に潜り込み、マッハトルネイドで連続

攻撃した。
　すると、その亀は体勢を崩し倒れ込んだ。
「亀が倒れました、チャンスです！」
「今だ、りょう！」
「いくぞぉ！　どおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
　そして、りょうが斧を持って亀に突っ込んでいき、それを振るって亀を真っ二つにした。
　切り裂かれた亀は、黒い霧となって消滅するのであった。
「改めて見ましたが、りょうさん、すっごい力持ちですねぇ～」
「私が聞くのも野暮だが……お前は、本当にただの村人なのか？」
「えっ？　すま村で生活してた時は普通に邪魔な木をこうやって切ってただけだよ？」
　さらりと当然の如く言うりょう。
　りょうは一見するとただの村人にしか見えないが、
　斧やスコップを軽々と振り回したり大型の魚を釣り竿1本で釣り上げたりなど、
　そのポテンシャルはかなりのものだ。
　理由を話すと、メタ発言になってしまうので話せないが。
「……まぁ、おかげで危機は脱する事ができた。さぁ、早く希望を見つけ出すんだ」
「私のお腹も空きましたしね～」
「君はいつもお腹が空いてるんじゃない？」
　三人はりょうが先ほど見つけた足跡を辿りながら先に進んでいった。
「あれ？　足跡が……」
　だが、途中で足跡が途切れてしまっていて、
　その足跡の主がどこに行ったのか分からなくなった。
「どうしよう、これじゃあ道標が分からないよ」
「直感で探そうにも、ここは広いですし……」
　う～んとヨッシーは頭を捻る。
　メタナイトやりょうも、別の手掛かりを探す気力を無くしかけてい

た。
「くっ、このまま希望を見つけ出せず、ここで果ててしまうのか……！」
三人が困り果てた、その時だった。
―ああ……近い……人の姿が……近い。
「こ……この声は!?」
メタナイトの頭の中に、女性の声が聞こえてきた。
「まさか、テレパシーか!?」
「どうしたの、メタナイト!?」
「女の声が聞こえてきた。近い、と言っていた」
メタナイトがヨッシーとりょうに説明をする中、彼の頭に響く声はさらに続く。
―あなた達が目指すラストホープは、ここから北に……歩、東に……歩です。
「それは真か!?」
―ええ。とにかく、頼みますよ……！
それを最後に、女性の声はぷつりと途絶えた。
「……希望は、近い」
「えっ？」
「彼女の言う通り、北に……歩、東に……歩進め！」
「なんだかよく分かりませんけど、分かりました！」
メタナイトの指示に従って、りょうとメタナイトは北東に進んでいった。
すると、ある程度進んだところで町が見えた。
「恐らくはあそこが希望だ」
「ねぇ、メタナイトさん、また邪魔が入ったりしませんよね？」
「あの亀が最大の障害と私は睨んだ。故に、もう邪魔が入る事はないだろう」
「ですよねぇ～。安心しました」
「ともかく、もうすぐ希望が見えてくる。行くぞ！」
「「はい！（うん！）」」

「やっと着いたぁ～～～～」
そして数分後、ヨッシー、メタナイト、りょうはラストホープに到着した。
「す、すげぇ……」
「ホントに自分の足でここに着きやがった……」
アスティマのテレパシーがあったとはいえ、スマブラメンバーに助けてもらわずに
ラストホープまで辿り着いた彼らにマリオとピカチュウは驚いた。
「お、お腹空きましたぁ～～～。早く食べ物をください～～～～」
ラストホープについて早々、ヨッシーは大急ぎで食べ物を求め動いた。
アスティマは「落ち着いてください」と宥めた後、
不思議な力でヨッシーの目の前に大量の食べ物を出した。
「ぱくぱくぱくぱく……あぁ生き返りました～」
「あっはは、よっぽどお腹が空いてたんですね。おかげで精神力をかなり消耗しました……」
「ああ、こいつは俺の相棒のヨッシーだ。大食いだけど頼れる奴だぜ」
マリオがヨッシーについてアスティマに紹介する。
「私はアスティマ。このラストホープを治める者よ」
「メタナイトだ、剣技には自信がある」
「すま村のりょうで～す、よろしくね」
「よろしくお願いしますね、皆さま」
「「よろしく！」」
アスティマもまた、お辞儀をしてヨッシー達に自己紹介をした。
「それにしても、他の奴らはどこに行ったんだ？」
マリオは辺りをきょろきょろと見渡した。
あくまで今の目的は、散り散りになっている仲間を探す事だからだ。
「あっ、でも今日は精神集中は使えませんからね」
「分かってる、今日は休んでおけ、アスティマ」
「……はい。お言葉に甘えさせていただきます」

そう言って、アスティマは休憩に入った。
休憩の途中で、アスティマはマリオを見て思う。
（……ふふ、マリオさまはこんな世界でも希望を捨ててはいないのですね。
太陽のない世界に現れた、１つの太陽のような、眩しさと明るさを感じます。
その明るさによって、みんなも元気づけられているようですね。
私は、そんなマリオさまの事が……）
「ちょっとアスティマ、何マリオを見てるの？」
「はっ！　な、なんでもありませんよ？」
ピーチに声をかけられたアスティマは、はっと我に返った。
（絶対に、この世界に光を取り戻してみせる！　だからみんな、俺を見捨てるなよ……！）

第12話　仲間割れ

一方、その頃……。
「兄さん……一体どこにいるんだろう……」
「こんな遠くにいたら、分からないね」
マリオの双子の弟ルイージと、彼の従兄弟のドクターはどこかの荒野を彷徨っていた。
「まぁ、回復役の僕がいるから魔物が襲い掛かってきてもある程度は大丈夫だと思うんだけどさ」
「二人、しかも兄さんの身内だけだと、ねぇ……」
「はぁ……」
溜息をつくルイージとドクター。
「せめて、他に仲間がいてくれればいいんだけど、そんなのがいるわけがないよねぇ」
こんな世界では、仲間も水も食糧も見つかる確率は非常に低い。
それでも、0ではないと信じて、ルイージとドクターは荒野を歩き回った。
「あれは……！」
「ルイージ君!?」
すると、ルイージは廃墟を見つけたようでそこに向かって走っていった。
ドクターも何とか、ルイージにギリギリ追いつく速度で走り出した。
「ここに何かあるかな……？」
ルイージが廃墟を一生懸命調べてみると、なんと携行食糧が見つかった。
「こ、これは……食糧じゃないか……！」
「数は3つ……。この世界では貴重だからね、持って行かなくちゃ」
ドクターはポケットの中にルイージが見つけた携行食糧をいくつか入れた。
その後、廃墟を調べてみたが、特に何もなかったので、二人はそこ

を後にするのだった。
「おーい、マリオくーん、どこにいるんだーい？」
「兄さーん、兄さーん」
ルイージとドクターは、大声で行方不明のマリオを呼んでいた。
だが、いくら呼んでも彼が来る気配はなく、ただ時間だけが空しく過ぎていた。
「やっぱりいないか……」
「ああ、今はもう、誰でもいいから仲間がほしいよ……」
ルイージが何歩か歩いた、次の瞬間。
「ひゃぁっ！」
突然、ルイージの顔ギリギリに針が飛び、頬を掠って軽い出血をした。
「ど、どうしたんだいルイージ君!?」
「だ、誰かが針を飛ばしてきた……」
「そうか、君は僕達に敵意を向けてるんだね。さあ、僕達の前に姿を現すんだ！」
そう言ってドクターは針を飛ばしてきた方に顔を向けてみた。
すると、彼の前にはまるで異国の戦士のような容貌の人物がいた。
その人物の目は鋭く、まるで獲物を見ているかのようだった。
「シーク君！　どうしてこんなところに？」
「……敵か……？」
「シーク、僕達は敵じゃないよ！　ルイージとドクターだよ！」
「果たしてそれは真か？　敵が姿を変えたものではないな？」
どうやらシークは、ルイージとドクターが偽者かもしれないと疑っているらしい。
「だからっ、僕は本物のルイージで」
「僕は本物のドクターだよ！」
「騙されはしない……必ず、正体を暴く！」
そう言ってシークはルイージに襲い掛かってきた。
「ああ、もう！　どうしてこうなるんだ！」
「どっちにしろ、やるしかないみたいだね！」

「フッ」
「速い！」
シークが素早い蹴りを放ってルイージを攻撃する。
そのスピードは速く、ルイージは避けられずにダメージを受けてしまう。
「シーク君、目を覚ますんだ！　カプセル！」
ドクターはカプセルをシークに向けて投げ、正気に戻そうとするが、
シークが正気に戻る気配はなかった。
「はぁ……まったく、暴走ってのは恐ろしいね」
「味方までも敵とみなし襲い掛かる……ぐぅっ！」
さらにシークの二度蹴りがルイージを正確に捉え打ち据えていく。
「ルイージ君、大丈夫かい？」
「か、かなり痛いよ。でも、僕だってやられっぱなしじゃないよ！
ファイアボール！」
ルイージは手から緑の火炎弾を放つ。
シークはそれを飛び上がってかわすが、ルイージの狙いはそれであり、
シークは下にいたドクターのスーパージャンプパンチを受けてしまう。
「やっぱり、シークを元に戻すには、シークと戦わなくちゃいけないのかな？」
「ちょっと辛いけど、仕方のない事だ」
ルイージもドクターも争いを好まない性格であり、シークと戦うのも辛そうな様子だった。
しかし、今のシークは「暴走」しており、まずは一度、戦闘不能にしなければならなかった。
スーパージャンプパンチを受けたシークはジャンプして斜めに針を投げつけた。
「いった！」
「うわぁっ」

「炸裂丸」
針を受けてよろめいたドクターにシークが見えない爆弾を取りつけ、
爆発した直後に糸でドクターを引き寄せる。
そこからドクターは手刀と蹴りの連続攻撃を食らってダメージを受ける。
「はぁはぁ……僕はあまり体力がないから、少しは手加減してくれるかな」
「そう言われて手加減をする私ではない！　覚悟しろ、偽者め！」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
シークはそう言ってドクターに容赦ない一撃を加える。
ドクターはそれを受け、大きな叫び声を上げて倒れた。
「……どうして、どうしてなんだ……」
ドクターと共にシークと戦っていたルイージは、この戦いに疑問を抱いていた。
こんな戦いで、本当に生き残れるのだろうか。
こんな戦いに、本当に意味はあるのだろうか、と。
「……これで、とどめだ」
シークは倒れたドクターのところにゆっくりと近づいてくる。
そして、手刀を振りかざした、その時。
「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」
ルイージが頭から突っ込んでいき、
それがシークに命中すると大爆発を起こしてシークを吹き飛ばした。
そう、ルイージロケットが暴発したのだ。
「ル、ルイージ君……？」
「僕はこれ以上、仲間同士の戦いを見たくない！」
ルイージは優しい性格なので、仲間同士が乱闘以外で戦うところを、誰よりも嫌う。
普段は大人しいものの、いざという時の行動力は兄・マリオと互角なのだ。

「だから、今ここで僕は、君を止める！」
「ならばやってみろ！」
「ドクターは、危ないから下がっててて」
「……うん」
シークはドクターを下がらせたルイージに立ち向かうが、
ルイージはファイアボールを飛ばして牽制し、その隙に足を掴んで地面に叩きつける。
「くっ、よくも……」
「アイスボール！」
何とか立ち上がったシークは蹴りを放とうとするが、
直後にアイスボールを受けて両足が凍り付く。
「くっ、動けない……」
「まだまだ！」
ルイージは攻撃は最大の防御と言わんばかりにぽこぽこパンチで連続攻撃し、
さらにどんけつとねこパンチをシークに食らわせてダメージを与える。
その戦いぶりは、今までのルイージからは想像できないほどだった。
「これで……終わりだ！」
そして、ルイージが地獄突きを放つと、シークは戦闘不能になるのだった。
「……ん」
しばらくして、シークはゆっくりと起き上がる。
「……僕は一体、何をしていたんだ」
「さっきまでの出来事、覚えてない？」
ルイージがすぐに事情聴取を行うと、シークは静かに口を開いた。
「少しだけだが覚えている。僕の周りには誰もいなかったからな。
何もなく、徐々に不安になっていき……理性を失ってしまったようだ」
どうやら、シークはこの世界に飛ばされた時には単独行動をしてい

たらしい。
　そのせいで、シークは精神的に不安定になり、ルイージ達を攻撃したのだろう。
「君達を偽者だと思い込んでしまって、本当にすまなかった」
　シークは二人を攻撃した事を謝った。
「別に、気にしなくても大丈夫だよ」
「もう、済んだ事だし……ね」
　理性を失っていたとはいえ、敵となったシークとすっかり仲良くなったルイージとドクター。
「それにほら、少ないけど食糧は持ってきてるし、せっかくだから僕達と一緒に行かないかい？」
　ドクターは携行食糧を取り出し、シークに同行を勧めてきた。
「いいのか？」
「うん」
「それに、歩いていればきっと仲間も見つかると思うし……」
　こんなところで考えていても何も始まらないと思ったルイージはシークと同行する事を決めた。
「じゃあ、早速みんなを探そう！」
「ああ！」
　シークを仲間に入れたルイージとドクターは、はぐれた仲間と合流するために歩いていった。

第13話　魔よりも恐ろしきは人

ルイージ、ドクター、シークは、仲間を探すために先に進んでいった。
「しかしまぁ……ここはとっても広いね」
「しかも、何もないな……」
現在、ルイージ達が見つけたものは、廃墟からの携行食糧のみであり、
それ以外は何も手に入れていない。
シークの言う通り、この世界はほとんど何もなく、それが探索の困難さをさらに強めていた。
「せめて何かの痕跡があればいいんだけど、こんなところで見つかるわけがないよね」
「もしくは、あっても極めて分かりにくいものだ」
「はぁ……」
なんて不親切な世界なんだろう、と嘆くルイージ。
しかし、グダグダと文句を言っていても仕方ない。
先に進まなければ、道は開かれないのだ。
―ガサゴソ、ガサゴソ
「……ん？」
ふと、シークは遠くで何か音を聞いたようで立ち止まる。
「どうしたの、シーク？」
「向こうで、何かが聞こえる」
「何の音だろう……」
ルイージ、ドクター、シークは慎重に、音源に近付いていった。
すると、三人の男女が死体から使えそうなものを漁っていた。
ルイージは恐る恐る、その中の一人に話しかける。
「あ、あの……何をやってるんですか……？」
だが男性は一心不乱に死体漁りをしていて、ルイージの話を全く聞いていない。
「どうやら僕達の事は目に入ってないみたいだね。気にしないで、先

に進もうか」
「うん、そうだね」
男女を無視して先に進もうとすると、女性はドクターの膨らんでいるポケットを見た。
「それは……？」
女性はドクターに話しかけたが下手に答えるとまずいと判断したドクターは何も言わなかった。
「……」
「何なの……？」
「……」
「ねぇ、教えてよ……」
「……」
「お願い……」
「……」
女性の言葉を只管無視するドクター。
すると、痺れを切らした女性の形相が変わり、ルイージ達に襲い掛かってきた。
同時に、男性達も女性に続いて襲い掛かる。
「よこせぇぇぇぇぇぇ!!」
「まずい、みんな逃げるよ！」
ルイージ達は大急ぎで逃げ出した。
仲間を探したいという気持ちよりも、
携行食糧を奪われたくないという気持ちの方が勝っていたようだ。
数分走った後、男女の姿は見えなくなった。
だが、思ったよりも男女は執念深かったため、かなり離れてしまったようだ。
といっても、目印がないこの世界ではそんなのは無意味だと思われるが……。
「ここまで逃げれば、もう大丈夫かな？」
「体力は消耗してしまったが、彼らに食糧を取られるよりはマシだ」
「ここって、魔物以外にもこんなのがいたんだね。僕達の世界では、想

像もつかない事だよ」
「魔物よりも性質が悪いんじゃない？　この人達は」
「ああ……人の欲望は、恐ろしいものだ。このような強欲な者は、恐らく自滅するだろう」
「でも、あの人達は多分……必死だったんだと思う。そうしてあげなきゃ……」
「甘いな」
　ルイージの甘さをシークは指摘した。
「君はこの世界にいる全ての人達を救えるのか？」
「えっ？　できる、けど……」
「それがいけないのだ！」
「えっ！」
　シークの声が大きくなったためルイージは驚いた。
「僕が言った『この世界にいる全ての人』とは『スマブラメンバー全員』の事ではない。
　先ほど出会った人達も含まれるのだ」
「あ、あんな人達も……？」
「そうだ。僕達が生き残るためには、他の人を犠牲にしなければならない。
　利己的かもしれないが……それがこの世界の理だからな」
　それでも、スマブラメンバーだけは絶対に犠牲にしたくない、とルイージはシークに言った。
　シークは当然だ、とでも言うように頷く。
「今は自分の身を守る事を大事にしろ。仲間を助けるのは、その次だ」
「う、うん……」
　その頃、ラストホープでは……。
「マリオさま、マリオさま」
「なんだ？」
　アスティマがマリオの肩をポンポンと叩く。
「遠くの方から、人の気を感じますよ」
「ん……精神集中してないのに感じるのか？」

「ええ。少しだけ力が戻ってきていますから。まだ、完全には戻っていませんが……」
アスティマはスマブラメンバー全員をこの世界に召喚してからは力の大半を失っていた。
しかし、徐々にその力も戻ってきているらしく、
精神集中せずとも遠くにいる者の気を感じる事ができるようになった。
「一体、どこから聞こえてきたんだ？」
「分かりません……」
「だが、行ってみる価値はあるな。おーい、リンク、カービィ、ピカチュウ！」
マリオは大声でリンク、カービィ、ピカチュウを呼んだ。
「なんだ？」
「アスティマによれば、遠くの方に誰かいるみたいだぞ」
「もしかして、バラバラになった仲間かな？」
「そうかもしれないな。早めにここに連れて行かなければ大変な事になる」
「よぉし、善は急げだ。行くぞ！　アスティマ、しっかりここを守ってくれよな」
「……はい！」
仲間を探すため、マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウはラストホープを出るのだった。
「……なんだか、ここに来てからは僕達」
「影が薄くなっちゃったね～」
ネスとリュカはぽつりとそう呟いた。

第１４話　家族との再会

マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウは、アスティマが感知した人を探していた。
「アスティマは一体、どんな奴を見つけたんだろう」
「どんな人かは分からないけど、とにかく、また仲間が見つかってよかった！」
「まだ出会ってないけどな」
「あうー」
ピカチュウの突っ込みにへこむカービィ。
「ま、とにかく先に進んでみなきゃ分からないぜ」
「そうだね」
スマブラ四天王が先に進んでいくと、三体のゾンビと人の形をした化け物が姿を現した。
「またゾンビかよ、でも俺達が蹴散らしてやる！」
マリオがファイアボールで牽制した後、リンクがゾンビを斬りつけて攻撃する。
ピカチュウも敵陣に突っ込んでかみなりを繰り出し、ゾンビ達を一網打尽にする。
「せぇいやぁぁぁっ！」
カービィもファイナルカッターを繰り出してゾンビを攻撃する。
「危ない！」
ゾンビがマリオに向かって爪を振り下ろしたが、
リンクがマリオを庇い代わりにダメージを受ける。
もう一体のゾンビもピカチュウに噛みつき、人の形をした化け物もリンクを殴る。
「こいつ、タフだな……」
「全然倒れないよ……」
人の形をした化け物のタフさに苦しむカービィとピカチュウ。
「そんな時こそ」
「俺達に任せろ！」

そう言うとマリオはファイア掌底を、リンクはスマッシュ斬りを繰り出した。
すると、人の形をした化け物は大ダメージを受けて叫び声を上げた。
「確かに体力はあるが、意外と防御は脆いようだな。
だから、強力な一撃を与えれば楽に倒せるぞ」
「だったら、ゾンビは俺達に任せて、マリオはその化け物に専念しろ！」
「おう！」
リンク、カービィ、ピカチュウはゾンビの群れを担当し、
マリオは人の形をした化け物を担当した。
「とりゃ！」
「えいっ！」
「食らえ！」
カービィは短い手足で懸命にゾンビを攻撃し、リンクは遠くからゾンビの群れに爆弾を投げ、
ピカチュウは電撃をゾンビに食らわせる。
マリオは人の形をした化け物に殴られながらも、
パンチやキックで人の形をした化け物にダメージを与えた。
人の形をした化け物の動きは鈍ってきており、体力が残り僅かになっているという証だった。
「これで、とどめだ！」
そして、マリオがファイア掌底を人の形をした化け物に当てるとドロドロに溶けて消滅した。
マリオはややグロテスクなそれを見て若干気分が悪くなったが、
それを振り切りゾンビの群れに突っ込んでいく。
そして、リンク、カービィ、ピカチュウと共にそれぞれの持つ必殺技を繰り出し、
ゾンビ達を全滅させるのだった。
「まったく、ここはホントにゾンビだらけだぜ」
「キング・オブ・ザコとはいえ、数が多いからね」

「それでも、これから先に待ち受ける試練を乗り越えれば、目的は達成できるさ」
「そうだな。改めて気合を入れるぞ！」
「「「「おーっ!!」」」」
黒い空間の中で、スマブラ四天王が気合を入れる様子を女性が光のない金色の瞳で見ていた。
「まったく、どうしてこんな世界でも希望を失わないのかな？
普通、こんなところに来たら、すぐ死んじゃうのに……。
まぁ、あいつらは『普通』じゃないからかな！」
スマブラ四天王がある程度歩いていると、遠くに緑の帽子を被った男と医者の格好をした男、
そして忍者のような風貌の人物の姿が見えた。
「あれは……スマブラメンバーか？　おーい！」
マリオが彼らに向かって手を振ると、向こうにいた三人の人物もそれに反応して手を振る。
すると、三人の人物がマリオ達の方に向かって走り出した。
「ルイージ、ドクター、シーク！　無事だったか！」
その人物は、ルイージとドクターとシークだった。
「うん……兄さん達もよく無事だったね」
「ああ、この辺でゾンビ達に出会ったが」
「俺達で蹴散らしたぜ」
「でも、これで仲間が見つかってよかった！」
「生きていてくれて……本当によかったぜ、ルイージ、ドクター」
新たな仲間と出会えて喜ぶスマブラ四天王。
特にマリオは、自分の身内と再会できたために大きな喜びを表していた。
「当たり前さ、僕だって兄さんを探してたんだから、これくらいで倒れるわけがないよ」
「それにほら、これだって手に入れたんだ」
「おおっ！」
そう言ってドクターはマリオ達に廃墟で手に入れた携行食糧を見

せた。
「この世界では、食糧は貴重なんだ。だから、少しずつ、大事に食べようね」
「ああ」
ルイージ達を仲間にしたスマブラ四天王は、
ラストホープに戻るため、元来た道を引き返そうとしていた。
「兄さん達は、これからどこに戻るの？」
「ラストホープ、ってところだ」
「なんだそれは」
「最後の希望って意味で、アスティマが治めているこの世界の本拠地なんだぜ」
「じゃあ、そこに行けばとりあえずは安心って事？」
「まぁ、そうなるな」
七人がラストホープを目指して歩いていると、突然、地面から何かが噴き出してきた。
「なっ!?」
「これは……試練の予感がする……！」
そう言ってリンクは剣を抜いてすぐさま戦闘態勢を取った。
「えっ!?　な、な、何なんだい!?」
何が来るのか分からず、慌てるドクター。
すると、地面から人間と魚が混ざったような容姿の巨大な魔物が現れた。
「こ、これは……」
「間違いない、俺達をラストホープに行かせないために立ち塞がっているんだな！」
「って事は、つまり……？」
「戦えって事なんだよ！」
「だったらやるしか……ないよね？」
「ああ、くたばるわけにはいかないしな！」
マリオ、カービィ、ピカチュウ、ルイージ、ドクター、シークが戦闘態勢を取ると同時に、

巨大な魔物が襲い掛かってきた。
「うわぁぁぁっ！」
魔物の叫び声と同時に、闇の波動がマリオ達を襲った。
マリオとピカチュウは何とかかわせたがそれ以外のメンバーは軽傷を負う。
「水がないのに、なんで津波が……？」
「あいつの特性だろうな、気にせず行くぞ！」
そう言ってマリオはファイアボールで牽制し、
リンクの剣技とピカチュウの電撃が魔物に命中する。
カービィはルイージが放ったファイアボールを吸い込んでファイアをコピーし、
口から火を噴いて魔物を攻撃した。
「リンク君、これを」
「サンキュ」
ドクターはリンクの体力が減っていると判断し、カプセルを投げて彼の体力を回復させる。
「はぁぁっ！」
「せいっ！」
シークは身軽な動きで飛び上がり、
その勢いで魔物に飛び蹴りを放った後に反撃を受けないよう離脱する。
ドクターは魔物が吐いた灰色の霧をかわしつつ心臓マッサージで魔物を攻撃する。
しかし、魔物の固い部分に当ててしまいダメージは与えられなかった。
「そらよっ！」
ピカチュウは相手の懐に近づいて電撃を繰り出し魔物に強烈なダメージを与え、
さらにリンクが疾風のブーメランで怯ませた後にファイアカービィの火吹き攻撃が入る。
マリオ、ルイージ、シークは飛び道具で魔物を牽制しつつ体術で援

護攻撃をする。
「ったく、どんだけタフなんだよあいつは」
「俺達が戦ったあの化け物以上と見えるな」
この魔物は、人の形をした化け物以上にタフな体力を持っていて、なかなか倒れない。
早めに倒さなければ、疲労が蓄積して、しまいにはダウンしてしまうのだ。
だが、魔物のダメージも蓄積しており、もう少しで倒す事ができそうだった。
「あと少しだ。僕達のとっておきの一撃を」
「あいつらに」
「与えなきゃね！」
そう言って、マリオ、ルイージ、ドクターは自分の右手に力を溜める。
「「トリプルジャンプパンチ!!」」
「とりゃぁぁぁっ！」
そして、マリオ、ルイージ、ドクターが大ジャンプをしてパンチを繰り出し、
魔物を空の彼方に吹っ飛ばすのだった。
「試練の嵐は、過ぎ去ったようだな」
魔物が吹っ飛ばされたと同時に、周辺から魔物の気配が消えた。
「もう魔物も来ないようだし、安心してラストホープに戻れるね」
「ああ。道は覚えているよな？」
「も、もちろん！」
「自信はなさそうだな……とりあえず、俺から決して離れるなよ」
そう言い、マリオ達はラストホープに戻っていくのだった。
しかし……。
「まさかあの魔物を退けられるとは、ね。だけど、本当に怖いのは、魔物じゃないんだよ？」
くすくすと、女性がマリオ達の様子を見ていた。

第１５話　仲間を探すために

無事にラストホープに到着したスマブラ四天王とルイージ、ドクター、シーク。
「お疲れ様です。仲間も増えてきましたね」
アスティマの言う通り、ラストホープは以前と比べて賑やかになっていた。
「本当にここは快適だよね」
「あの地獄が嘘みたいだよ」
「食べ物もたくさんありますしね～」
ルイージ、ピット、ヨッシーはワイワイとラストホープで会話をしていた。
「ははっ、楽しそうだな……うん、うん」
その様子をマリオ達は微笑ましく見ていたが、
同時に、元の世界に帰りたいという願いも一層強くなった。
「……皆さん、どうしたんです？　なんだか、寂しそうな表情ですよ」
「ああ、この光景を見たら元の世界を思い出しちゃってな」
「……」
マリオ達は元の世界に帰りたかった。
だが、何も問題を解決せずにこの世界を立ち去るのは、
マリオ達にとってはあまりにも屈辱だったため、今、帰るつもりはないようだ。
「……元の世界に帰りたいのですか？　ですが今、私の力は……」
「そんな事はどうでもいい！　今はお前の言う通り、この世界を救ってからそれは考えるぜ！」
そう言うリンクの表情に曇りはなかった。
彼の表情を見たアスティマがほっと一安心する。
「ああ、本当にあなた達を呼んでよかった、と私はこの時思っています。
他の人を呼んでいたら、無理矢理にでも元の世界に帰っていたでしょうから……」

「俺達はお前を絶対に裏切らないから安心しろって」
「……はい！」
ピカチュウもまた、アスティマの事を信頼しているようだ。
その頃、カービィはというと……。
「食～べ～さ～せ～て～！」
ドクターが持っている携行食糧を食べようとしていた。
「だ～め、これを君一人で全部食べたら大変な事になっちゃうんだよ？　カービィ君」
「ぶ～ぶ～」
「というわけで、これはアスティマ君に預けるよ」
ドクターはカービィに携行食糧が食べられないように、
急いでアスティマのところに行って彼女に携行食糧を預けた。
「さて、これからどうしましょうか」
ラストホープの中央に集まったのは、アスティマ、マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ、
ヨッシー、フォックス、ファルコ、サムス、マルス、ロイ、アイク、ルフレ、
ネス、リュカ、メタナイト、ロゼッタ、シュルクだった。
「まずは、仲間探しを優先させよう」
「んで、この世界を救って元の世界に帰るんだ」
この世界には、散らばったスマブラメンバーがまだまだ残っている。
彼らを探さなければ、次のステップには進めないとマリオは判断したからだ。
「そのために、今から４つのチームを編成しようと思っているのですね？」
アスティマの言葉に、マリオは首を縦に振った。
「では、チーム分けはこちらが行います」
アスティマによるチーム編成の結果、以下のようなチームができた。
Ａチーム：マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ

Bチーム：フォックス、ファルコ、ネス、リュカ、サムス
Cチーム：ヨッシー、メタナイト、ロゼッタ、シュルク
Dチーム：マルス、ロイ、アイク、ルフレ
「まぁ俺達は当然、この編成だよな」
「でも、なんで私がこっちのチームなんですか～？」
「この方が、バランス的にいいと思いまして」
Bチームのネスとリュカは超能力による攻撃力が高いが、その分、足が少し遅く、
それを足の速いフォックスとファルコ、飛び道具を使うサムスが補う形となっている。
Cチームも、足の遅いロゼッタを足の速いメタナイトがサポートし、
バランスの良いヨッシーとシュルクが入っている。
Dチームも、バランス、パワー、スピード、ブレインと揃っていて隙のない構成だ。
「この編成に異議のある方は挙手してください」
誰も手を挙げなかったため、アスティマは立ち上がり指示を出した。
「では、Aチームは北、Bチームは東、Cチームは西、Dチームは南に向かってください」
「おう！」
マリオがそう言うと、それぞれのチームはバラバラの場所に向かっていった。
「私は信じていますよ。あなた達が無事に、仲間を見つけ、ここに帰ってくる事を……！」
アスティマが編成したチームは、散らばった仲間を探すため、
この世界のあちこちに分かれて行動した。
マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウは北。
「ファイアボール！」
「回転斬り！」
「ハンマー！」

「かみなり！」
フォックス、ファルコ、ネス、リュカ、サムスは東。
「俺とファルコが前に出るからネスとリュカは後方から援護してくれ」
「うん！　ネス君、一緒に頑張ろうね」
「もちろんさ！」
「へっ、こんな奴コテンパンにやっつけてやるよ」
「油断は禁物……よ」
ヨッシー、メタナイト、ロゼッタ、シュルクは西。
「行きますよ～」
「モナドからの、バックスラッシュ！」
「行け、チコ！」
「うりゃりゃりゃ！」
マルス、ロイ、アイク、ルフレは南。
「せいっ！」
「やあっ！」
「はあっ！」
「エルファイアー！」
それぞれが持っている技で、ゾンビやゾンビ犬を一掃していくチームメンバー。
敵は多いが、このくらいで挫ける彼らではない。
また、もしもゾンビ達にやられてしまえば、
この世界の一般人とそれほど変わらないという結果になってしまうと思う者もいるからだ。
それだけは避けたい、と彼らは思っているのだ。
だが、それを見ているのは、光だけではなかった。
「ふふふふふふ……。全て、ボクの思惑通り……」
果たして、この世界は本当に救われるのだろうか。
それとも、破滅へ向かっていくのだろうか。

第16話　クッパ親子登場

この世界に散らばった仲間を探すために北に向かっていた
マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウは、ゾンビを倒しながら先に進んでいた。
「しっかし、本当にここってゾンビだらけだよな」
「だよな」
マリオ達は辺りをきょろきょろと見渡したが、
見えるのはゾンビと今いる仲間ばかりで、それ以外の存在は見えなかった。
ゾンビを倒しながらカービィは言う。
「もう、どうしてこんなにいっぱいいるの！」
「我慢しろ、仲間を見つければそんな考えは吹っ飛ぶっての」
「ぶぅ……」
スマブラ四天王が歩いていると、倒れている女性を発見した。
幸い、女性は生気の無い表情をしているが生きているようでマリオは安心する。
「ど、どうしたんだ！」
「せ……せな、か、を……」
「うわっ！」
マリオが女性の背中を見てみると、そこには大きな傷が刻まれていた。
まるで、何かに切り裂かれたかのような。
「なんて酷い傷だ……」
「一体、誰がやったんだろう……」
「魔物だったら、そいつを退治するだけでいいんだが……」
「とにかく、君を攻撃した人はどこにいるの！」
カービィの問いに、女性は東の方を指差した。
「あっちだね！　分かった！　みんな、この人の敵を討つよ！　仲間を探すのはその後！」
「いや、まだ死んでないっつーの」

カービィのボケにピカチュウが突っ込みつつ、スマブラ四天王は女性が指差した方に向かった。
だが、向かう途中で、ゾンビが襲い掛かってきた。
「ま、またゾンビか!?」
「でも、これって……」
しかし、そのゾンビは今まで出会った人型や犬型ではなく、亀型であった。
「骸骨の亀は見た事があるが、ゾンビの亀は初めて見るな……ん？」
「どうしたんだ、マリオ？」
「いや、なんでもない。早くこいつらを倒して、先に進もう」
「だな」
数分後、スマブラ四天王はゾンビ亀を全滅させた。
「よーし、これで雑魚は終わったな」
「後は、ボスを倒せばいいんだね」
そう言って、マリオとカービィを先頭にスマブラ四天王が歩いていると、
「たっ、大変だぁーーーーー!!」
クッパクラウンに乗った一匹の亀が、マリオ達の方に向かって突進してきた。
「ジュニア!? どうしたんだ！」
クッパクラウンに乗っていたのは、クッパの息子ジュニアだった。
ジュニアは慌てた様子でマリオ達に話す。
「お、おかしくなったお父さんが、ぼくと、近くにいた人を」
「!!」
ジュニアの証言を聞いたマリオが絶句した。
女性とジュニアを傷つけたのはクッパだったのか。
確かにクッパはマリオの永遠のライバルだが、最近はかなり丸くなっているという。
そのため、彼がそんな事をするはずがない、とマリオは思っていたが、
それが打ち砕かれショックを受けた。

「ジュニア、クッパはどこにいるんだ!?」
「この先、この先！」
「じゃあ、案内してくれ」
「うん！」
ジュニアに案内されてスマブラ四天王が辿り着いた先にあったのは、
見境なく辺りのものを攻撃しているクッパの姿だった。
「クッパ……！」
恐らく、女性はそれに巻き込まれて重傷を負ったのだろう。
マリオは思わずクッパのところに駆け寄ろうとするが、ジュニアが「待って」と制止する。
「マリオ、突っ込んでいかないで！」
「なんでだよ!?」
「今のお父さんは敵と味方の区別がつかないみたい。だから今、近づくのは危険だよ！」
「ジュニア、お前は自分の親を見殺しにする気か？」
「そうじゃなくて……！」
マリオとジュニアの喧嘩を止めるべく、リンクが一人と一匹の間に割って入る。
「二人とも喧嘩はよせ！　要は『近付かなければ』いいんだろ？　ちょっと離れてろ！」
そう言うとリンクは二人を下がらせ、懐からデクの実を取り出すとクッパに向けて投げ、
それが爆発するとクッパと周囲にいたものが気絶した。
デクの実は衝撃を受けると強烈な閃光を放って相手を気絶させる効果があるのだ。
「よし、後はクッパをこっちに連れていくだけだ」
「で、でもどうやって……」
「カービィ、お前が口に入れて運べばいい。持ってるだろ？　大きな敵も吸い込む力を」
「……そうか、がんばり吸い込みだ！」

カービィが鏡の大迷宮事件で覚えた技、がんばり吸い込み。
これは、ある程度大きな敵を吸い込んだり、重いブロックを動かしたりできるようになるが、
その分、体力を余計に消費してしまうのが欠点だ。
「お前ならできる、やれって！」
「うん！　よぉーし！」
カービィは全力で吸い込む力を強め、
結果、体力を消費しながらも何とか気絶したクッパだけを口に入れる事に成功した。
「よし、後はそのまま遠くに吐き出せ！」
「ふふ！　へひっ！（うん！　えいっ！）」
カービィはぺっと口からクッパを吐き出した。
「お父さん……」
クッパはまだ、気絶したままだった。
もし目覚めた時、自分が暴れて息子を攻撃した、
と聞かされたらどうなるだろうか、とジュニアは心配していた。
「心配するなよジュニア、しばらくしたら起き上がるさ。……ほら、な」
マリオの言う通り、しばらくしてクッパはゆっくりと起き上がる。
「……我輩は、何をしていたのだ……？」
ぼんやりとした様子のクッパが最初に見たもの、それは自分の息子・ジュニアだった。
「おお、ジュニア！　無事だったか！」
「ちょっと、痛かったけどね」
「痛かった？　何がだ？」
「ああ、うん、なんでもないよ」
お父さんが傷つけた、という言葉は口が裂けても言えなかったジュニア。
「ジュニアが無事なら我輩はそれでよかった。ところで、お前達は一体何をしているのだ？」
「俺達はこの世界に散らばった仲間を探してるんだ」

「んで、そいつらをラストホープに送り届けてる」
「ラストホープ？　ってなんだ？」
「アスティマって奴が治めてる、この危険な世界で唯一の安全地帯だ」
　リンクはラストホープについてクッパ親子に説明した。
「それで、そのラストホープとやらはどこにあるのだ？」
「ここから南に行って、それから西に行けば、いつかはラストホープに辿り着くさ」
「う～ん、説明が大雑把すぎるよ」
「それくらい目印がほとんどない世界だっての」
　はぁ、とクッパ親子は溜息をついたが、
　行動しなければラストホープに行く事はできないため、渋々二匹は歩く事を決めた。
「では、我輩とジュニアはこれからラストホープに戻る。
　お前達はお前達でやるべき事をやるがいい」
「頑張ってねー、みんなー！」
「ああ！　お前達に最高の希望を届けてやるから、ちゃんと待ってろよ！」
「大丈夫、僕達なら絶対生き残れるよ！」
「俺達は過酷な環境だけでくたばるような奴じゃねぇって事を証明してやる」
「じゃあ、行ってくるぜ、クッパ、ジュニア！」
「……ああ、勘違いするなよマリオ。あくまでも、一時休戦だからな！」
「分かってるっての！」
　スマブラ四天王はクッパ親子に別れを告げ、仲間を探しに行くのだった。
　ラストホープに戻る途中で、
　クッパ親子は先ほどスマブラ四天王が出会った傷ついた女性と出会った。
「……貴方は、さっきの……いや、やめて……」
　女性はクッパの姿を見て震えてしまうが、ジュニアは「もう平気だ

よ」と言う。
「ガッハッハ、我輩はここでも恐れられてるとはな」
「お父さん、冗談はやめて……。ここは本当に、危険な世界なんだよ？」
「ならばその危険な世界で、しぶとく生き残ろうではないか！」
こんな危険な世界でも、クッパは堂々としていた。
そんな父の姿に、ジュニアは勇気づけられる。
「……そうだよね、お父さん。今は、生き残ろう！」
「よーし！　我輩から離れるなよジュニア！」
「もっちろーん！」
なんだかんだで、かなり仲の良い親子であった。

第17話　ポケモントレーナー・ロート

クッパ親子と別れたスマブラ四天王は、
バラバラになった仲間を探すためにこの世界を歩いていた。
「なんとなく、飢え死にしてないか心配だぜ」
「ここはな～んにもないからね」
「ああ、本当に、な……」
この世界は、瓦礫などを除いて本当に何もない。
探す仲間が飢え死にしてしまうのは、スマブラ四天王にとって悪い結果になってしまうため、
早めに探さなければならない。
「お腹ペコペコなのホントにやだからね！」
「頼むから死ぬなよ、絶対にな！」
「死んだらただでさえ少ない希望がどんどん消えていってしまうからな」
「この世界での敵は、魔物でも人間でもない。過酷で、危険な環境だ」
その頃……。
「……っはぁ」
一人の少年が、息を切らしながら歩いていた。
少年の名はロート、ゼニガメのトルトゥ、フシギソウのフィオーレ、リザードンのブレイズを連れているポケモントレーナーだ。
ロートはそれぞれが消耗しないように順番に戦わせているのだが、あまりに敵が多いためポケモンも疲れているようだ。
「無理はさせないって決めたんだが……こんなにも敵が多いと……」
逃げるという選択肢もあったが、
いくら逃げても辺りは敵ばかりで安全地帯など見つかるはずがなく。
彼はただ、襲ってくるゾンビを自分のポケモンに倒させていた。
「本当に、この世界に希望なんて無いのか？　絶望だけしかこの世界にはないのか？
どうすれば、いいんだ……」

この過酷な環境にポケモン以外に仲間がいない今の状況が重なり、普通の少年であるロートの精神力は耐えられず、挫けかける。
「トルトゥ、フィオーレ、ブレイズ……」
「ゼニィ……」
「フシィ……」
「リザァ……」
せめて傍にポケモンだけはいてほしいと、
ロートはボールからトルトゥ、フィオーレ、ブレイズを出した。
「みんな、何があっても俺の味方でいてくれ。俺を、支えてくれないか……」
「ゼニゼニ！」
「フッシー！」
「リザー！」
「みんな、ありがとう。本当に……」
三匹のポケモンは、ロートに元気出せよ、とでも言うかのように鳴いていた。
彼らの姿を見たロートの心に、僅かだが明かりが灯った。
「じゃあ、俺と一緒に、希望を探そうな！」
「ゼッニー！」
「フシフシー！」
「リザァー！」
ロートはそう言ってボールにポケモンを全て戻し、希望を探すために歩くのであった。
スマブラ四天王がある程度歩いたところで、突然マリオが立ち止まった。
「どうしたの、マリおじちゃん？」
「これは……アスティマのテレパシーか！」
—はい、そうです。
マリオがそう言うと、彼の頭の中にアスティマの声が聞こえてきた。
—近いですよ、マリオさま。

アスティマのテレパシーを聞いたマリオは、もうすぐ仲間が見つかるという事が分かった。
「何人だ？」
―そこまでは分かりません。でも、見つかります。
「ああ、もう分かってるからテレパシーはそこまでにしておけ」
―はい。
その言葉を最後に、アスティマのテレパシーはぷつりと途切れた。
「マリオ、一体誰と話をしてたんだ？」
「アスティマとテレパシーで、な。後ちょっとで仲間が見つかるらしい」
「おおー!!」
散らばっていた仲間が見つかる。
それだけで、スマブラ四天王の顔が希望の光に照らされてぱっと明るくなる。
「もう少しだ、頑張るぞ！」
「うん！」
マリオを先頭に、リンク、カービィ、ピカチュウは前へ進み出した。
まるで、怖いものなど存在しないかのように。
そして四人がしばらく歩いていると、赤い帽子を被り、赤い服を着た少年とすれ違った。
「ん？　あれは？」
マリオは、その少年の方に向かって走り出した。
すると、ポケモントレーナーのロートと出会った。
「ロート！」
「お、お前はマリオじゃないか！」
「俺も」
「僕も」
「いるぜ」
ロートと再会したスマブラ四天王が口々にそれを喜ぶ。
「こうやって仲間に会えるだけで、俺達は嬉しいよ」
「それは俺だって同じさ、こうなるまではポケモンしか周りにいな

かったからな」
　仲間が増えるという事は、信頼できるものも増えるという事になる。
　何かに縋らなければ生き残れないこの世界、仲間を探すのは重要な事なのだ。
「で、なんでお前らはここに来たんだ？」
「アスティマって奴に頼まれて、この世界に散らばった仲間を探してるんだ」
「こうしなきゃ、次のステップに進めないってマリおじちゃんが言ってたんだよ」
　スマブラ四天王は、自分を探しに来たロートに事情を話した。
　それを聞いたロートは頷いてこう言った。
「じゃあ、俺もそれ、手伝っていいか？」
「もちろん！　……といっても、この辺にもう仲間はいなさそうだけど」
「ま、とりあえずラストホープに戻ろうか」
　そう言って、ロート達はラストホープに戻る道を歩いていった。
「しっかし、ここは本当に何もないなぁ」
「ああ……灰色の空と、赤茶けた大地以外は、な」
　前述の通り、ここはラストホープや瓦礫以外に何もかもが無い世界。
　現在、スマブラ四天王はラストホープを治める女性・アスティマに
「この世界を救え」と頼まれたのだが、
　手掛かりがほとんどない以上まずは仲間を探す事から始めたのだ。
「どうしてこの世界がこうなっているのか、俺達にはまだ分からねぇ」
「だけど、みんながラストホープに集まれば、
　きっと、この世界がどうなったのか分かると思うよ」
「そして、この世界を救うための手掛かりが見つかる、か。……う～ん……」
「ロー兄、あれこれ考えたらまた迷っちゃうよ！　まずは、ラストホープに帰ろ！」

「ま、それもそうだな。魔物がいる中でそれを考えるのは自殺行為らしいしな」
カービィの言う通り、スマブラ四天王とロートは一度、ラストホープに戻る事にしたのだった。
途中、ゾンビやブロブに襲われたが、それぞれの技を使って次々に撃破していく。
「あれ、ロートは戦わないの？」
「連戦でポケモン達が疲れてるのに無理に出すトレーナーはいないだろ。
それに俺、一応普通の人間だし」
「争いの世界に住んでる以上、『普通』じゃないと思うんだけどねぇ……」
「ん？　何か言ったか？」
「何も言ってないよ？」
果たして、この世界を救うための手掛かりは、本当に見つかるのだろうか……。

第18話　息ぴったりの登山家

「本当に、仲間は見つかるのか？」
　仲間を探すために東に向かっていたBチームの一人、ファルコがそう呟く。
「まぁ、行ってみなきゃ分からないからな。……おっと、危ない！　ブラスター！」
「ミサイル！」
　フォックスとサムスは襲い掛かるゾンビを武器や体術で倒しつつ先に進んでいく。
「どこもかしこもゾンビばっかりだぁ」
「まぁ、こんな世界だからな」
「油断は……禁物」
「当たり前さ」
「……おい、フォックス、今更だがアーウィンに乗らないのか？」
「……その、アーウィンはこの世界にないんだ。急に飛ばされたから用意も忘れて……」
「「えーーーー!?」」
　どうやら、急にこの世界に飛ばされてしまったため、
　アーウィンを元の世界に置き去りにしてしまったようだ。
　アーウィンに乗れれば時間短縮ができるのに、とネスとリュカは落胆した。
「仲間に連絡はできないの？」
　サムスの質問に、フォックスは首を振った。
「何度も通信したのだが、応答なしだった」
「何故……」
　ここは争いの世界とは異なる世界だから電波が届かないだろう、とサムスは推測した。
　とにかく、これで分かった事は、この世界では連絡手段が極めて少ないという事だった。
　すなわち、有力な情報を見つけたとしても、自分の足で知らせなけ

ればならないのだ。
「早くこんな環境からはとっととおさらばしたいぜ」
「でも、その前にまずは仲間を探してから、だよ？」
「分かってるっての！」
「も～う、なんでこうなるの～！」
「ほらポポ、しっかり歩きなさい！」
この地を歩いているのは、Ｂチームだけではなかった。
アイスクライマーのポポとナナである。
双子のようにそっくりだが、友達以上恋人未満の関係である。
「変な生き物は出るし、道標はないし、こんな世界はもう嫌だよ！」
「でも脱出する手段が見つかってないから、あたし達でそれを探すしかないみたいね。
これくらいでへこたれるんじゃないわよ、ポポ！」
「ナナは相変わらず押しが強いなぁ～；」
「何か言った？　ポポ」
「な、何も言ってないよ！」
襲い掛かってくる敵を、ハンマーや氷で蹴散らすアイスクライマー。
「これくらい、アイスクライマーの敵じゃないわ。さぁ、かかってきなさい！」
ふふんとハンマーを振り上げるナナ。
と、その時だった。
「……なっ、何よこれ……？」
アイスクライマーの目の前に、様々な人が混ざったような魔物が二体現れた。
「ナナ！　倒すんじゃなかったの？」
「そ、そうだったわね、ポポ……」
ナナはいつもの強気な態度と違って少し弱気になった。
それでも、ポポに言われたからには立ち向かわなければ、とポポと共にハンマーを構えた。
アイスクライマーは氷を放ったりハンマーで殴ったりして混ざっ

た人を攻撃したが、
タフすぎるために攻撃がなかなか通らない。
それどころか相手の攻撃の方が強烈で、アイスクライマーは大きなダメージを受けてしまった。
「ぐぅぅ……！」
「ナナ、無茶しないで！」
「分かってるわよ、それくらい……。でもね、あたし達はいつまでも一緒なのよ。
あんたを置いて、逃げるわけにはいかないんだから……！」
「……!!」
リュカは、遠くで二人の登山家が混ざった人と戦っているのを超能力で見た。
「あっちに、仲間がいる……！」
「どこに？」
「とにかく、真っ直ぐ進んで！」
「ああ、分かった！」
フォックス、ファルコ、サムス、ネス、リュカが見た光景、それは

混ざった人との戦いで苦戦している、アイスクライマーの姿だった。
「まずい、このままではあいつらが死んじまう！」
そう言ってファルコはアイスクライマーがいる場所に飛び出した。
「あ、ちょ、待ってくれファルコ！」
「待ちなさい！」
「僕達も」
「置いてかないで～！」
フォックス、サムス、ネス、リュカも、慌てて彼の後を追うのだった。
「おい!!」
「「あっ！」」
ファルコの大声を聞いたアイスクライマーが彼の方を振り返る。

「ファルコ、どうしてここに？」
「お前ら、死にたくなかったら俺と一緒に戦え！」
「えっ？　ど、どういう事……？」
　ポポが驚いていると、サムス、フォックス、ネス、リュカが、
　アイスクライマーのところにやって来た。
「俺はフォックス、こいつは仲間のファルコだ」
「僕はネス」
「ボクはリュカです！」
「私はサムス・アラン」
「とにかく、お前らがこのまま前に出たら危険だ、下がってろ」
「ええっ!?　僕達、まだいけるよ！」
「そうよ、邪魔しないで！」
　意地を張るアイスクライマーに対し、ファルコは鋭い目で二人を見る。
「……ここで死んだらもう終わりなんだよ」
　ファルコの目は真剣で、アイスクライマーは思わず怖気づいてしまう。
「分かったらお前らはとっとと下がってサポートに回りな」
「わ、分かったよ～；」
　一見きつい態度に見えるファルコだが、これも彼なりの仲間に対する思いである。
　フォックスとサムスは否定せず、頷いた。
「さぁ、フォックス、サムス！　こいつらを倒して早くラストホープに戻るぜ！」
「ああ！」
「当然よ」
「あっ、ちょっ、僕達を忘れないで～！」
　いつの間にか置いていかれたネスとリュカも、
　アイスクライマーを守るために混ざった人に立ち向かった。
「「はっ！」」
「せいやっ！」

「ＰＫファイアー！」
「ＰＫサンダー！」
フォックスがブラスター、サムスがミサイルで混ざった人を撃ち抜き、
ファルコはファルコビジョンで混ざった人を切り裂く。
ネスやリュカも、ＰＫファイアーやＰＫサンダーで、
アイスクライマーと共に後方から援護していた。
「うっわ、本当にタフだね」
だが、ネスの言う通り、混ざった人が倒れる気配はなかった。
「だからお前らは苦戦してたのか」
「苦戦って何よ、ちょっと手間取ったって言ってよ」
「ほらほら、喧嘩している暇があったら早くこいつらを倒せ！」
「はーい！」
その後も、フォックス達は体術や射撃で混ざった人を攻撃していくが、
混ざった人はなかなか倒れなかった。
「ああ、もう、どうして倒れないの！　どうしたら、こいつらを倒せるの！」
「ほら、ナナももう怒っちゃってるし……」
苛立つナナと慌てるポポを見たネスとリュカは、アイスクライマーの前に立った。
「だったら、ここはボク達に任せて！　行くよ、ネス君！」
「うん！」
ネスは混ざった人達にディフェンスダウンをかけ、
リュカはアイスクライマーにオフェンスアップをかけた。
「なっ、何をしたの？」
「攻撃力を上げるＰＳＩをキミにかけて」
「防御力を下げるＰＳＩをあいつらにかけたんだ」
「そして、俺達があれを一つの位置に集めたら」
「強烈な攻撃で一気に倒せ！」
ネス、リュカ、フォックス、ファルコが口々にアイスクライマーに

そう作戦を話す。
どうやら、とどめは彼らに刺させるようだ。
「……分かったよ。みんな、お願い！」
「ああ！」
フォックスとファルコは素早い動きで混ざった人が上手く一つの位置に集まるように誘導する。
サムスも混ざった人を撹乱するように動いた。
「よし、今だ！」
「うん！」
そしてフォックスの号令と共に、アイスクライマーがゴムジャンプで飛び上がり、
混ざった人目掛けてハンマーを振り下ろす。
「「でりゃぁぁぁぁぁぁ!!」」
そして、ポポとナナのハンマーが混ざった人に命中すると、
混ざった人は叫び声を上げてバラバラになるのだった。
「どんなもんだい！」
「どんなもんよ！」
「うわ～、まさに息ぴったりだったねぇ」
アイスクライマーの活躍に、ネスとリュカは拍手した。
「あっ、でも勝負の後はちゃんと回復させないとね」
そう言って、ネスはポポ、リュカはナナにライフアップをかけて傷を癒した。
「ありがとう、みんな」
「えへへ、それほどでもないよ」
アイスクライマーに感謝されて頭を掻くネスとリュカ。
「まったく、子供同士はすぐ仲良くできるんだな」
「それを見守るのもまた、大人だぜ」
フォックスとファルコは、子供組の様子を微笑ましく見守っていた。
サムスも、「よくやった」と子供組をたたえた。
「う～ん、後は特に何もなさそうだし、そろそろラストホープに帰ろう

か？」
「仲間も見つかったし、もうくたくた～」
「まぁ、いい情報は見つからなかったが、とりあえず、アスティマのところに戻ろうな」
「うん！」
そう言って、フォックス達はラストホープに向かう道を歩くのだった。

第19話　ポケモンとの出会い

さて、その頃のCチームである。
ヨッシー、メタナイト、ロゼッタ、シュルクは、
各々の技を駆使してゾンビ犬を倒していき、生きる事を望む人間を気絶させた。
「……こんな人達も、ここにいたのか」
「私達が生き残るためには、彼らも犠牲にしなければならないのか……？」
「そんなの、考えただけでも辛いです～」
争いを好まないヨッシーは、他人を犠牲にするという考えを持たず、苦しんでいる。
「しかも、この世界を救うために必要な情報が何一つ見つかっていないし……」
そう、シュルクの言う通り、この世界が何故荒廃しているのか、
という説明がこの世界に一切ない。
しかも、マリオによれば、
自分達をここに呼び出したアスティマすらも多くは語っていないという。
「とりあえず、僕達にできる事は、バラバラになった仲間を探す事くらいだね」
「情報を集めるのは、後にしましょうか～」
「……ゾンビも来ているしな」
「わっ！」
ヨッシーが慌てて飛び退くと、ゾンビが這いずり回っており、
しばらくしてそのゾンビが立ち上がるとヨッシー達を攻撃しようとした。
「私の邪魔をしないでください！」
「うりゃりゃりゃりゃ！」
ヨッシーがゾンビを蹴り飛ばした後、メタナイトがゾンビに突っ込んで乱れ斬りで倒す。

シュルクもモナド【疾】でスピードを上げた後にその勢いを利用してゾンビを斬りつけ、
そこにロゼッタのチコシュートが命中した。
が、ゾンビはあと一歩のところで倒れず、のろのろとヨッシーに近づいて引っ掻いた。
「あいたたた、やめてくださいよ」
ゾンビの攻撃で怪我をしたヨッシーが、そのゾンビに向かって卵を投げる。
そこにメタナイトのドリルラッシュが入りゾンビが倒されると、
今度はシュルクがゾンビをエアスラッシュで斬りつける。
「これで、とどめだ！　ギャラクシースマッシュ！」
そしてロゼッタがゾンビに向かって手をかざし、小さな銀河を発生させ、
ゾンビを吹き飛ばして戦闘不能にした。
「今回は未来視（ビジョン）を使わなくても勝てたね」
「相手の行動が単純だったからな」
「……さて」
シュルクは辺りを見渡し、何かないかを確認する。
「この辺にはもう、何もないみたい」
「というより何もなくない方が珍しいからな」
「とりあえず、先に進みましょうか～」
その頃……。
「くっ、どうやら囲まれてしまったようだな」
「戦闘は避けられないようだ」
はどうポケモンのルカリオと、しのびポケモンのゲッコウガが、
ゾンビ、ゾンビ犬、毒虫と戦っていた。
ルカリオには毒が効かないため毒虫の攻撃に脅威する必要はなく、
またゾンビとゾンビ犬も近距離攻撃しかできないため後衛のゲッコウガには届かない。
しかしそれは、ルカリオにのみ攻撃が集中するという事なのだ。
「ゲッコウガ、私が前に出るからお前は後方から援護をしてくれ」

「了解」
ゲッコウガがまず、かげうちでゾンビに不意打ちを行った後、
ルカリオは波導をその身に纏わせ、掌底を繰り出してゾンビを攻撃する。
隙を突かれてうろたえていたのか、ゾンビの攻撃はルカリオには当たらなかった。
ゲッコウガがみずしゅりけんを毒虫に投げつけた後、ルカリオははっけいでゾンビを攻撃した。
「意外としぶといな……」
「だが、俺達はこれで攻撃を止めるようなポケモンではない！　ハイドロポンプ！」
ゲッコウガは毒虫にハイドロポンプを繰り出し、毒虫を吹き飛ばして墜落させた。
「ぐぅ、うぅっ！」
ゾンビとゾンビ犬の攻撃を連続で食らったルカリオの表情が苦痛に歪む。
「無理はするな、引くのも大事だぞ」
「だがゲッコウガ、彼らが私達を逃がしてくれると思うか……？」
「む……」
ルカリオとゲッコウガは、これ以上ゾンビ達を相手にしたくなかった。
しかし、ゾンビ達がそれを許すはずがなかった。
「仕方ない、まずはこいつらを倒すぞ！」
そう言ってルカリオは毒虫に向かってはどうだんを放ち、
とどめにゲッコウガのみずしゅりけんが刺さり毒虫は戦闘不能になる。
続けてルカリオのしんそくとゲッコウガのかげうちが命中してゾンビを戦闘不能にし、
残るはゾンビ犬のみとなった。
しかし、ルカリオはここまで連続で攻撃を食らい続けているせいか体力が減少しており、

その表情にも疲れが見え始めてきていた。
そこにゾンビ犬が容赦なく体当たりを食らわせ、ルカリオは吹き飛ばされてしまう。
「ルカリオ！」
「くっ……。私はここで、終わるのか……？　ゲッコウガ……すま、な、い……」
最早限界ギリギリとなったルカリオは、意識を手放そうとしていた。
その時だった。
「ギャラクシーヒール！」
女性の声と共に、ルカリオの傷が急速に癒えた。
そして、しゅたっと女性―ロゼッタと共に、ヨッシー、メタナイト、シュルクが現れた。
「やはり、ここでは力が落ちているようだな……。全快には至らなかったか」
「ロゼッタに、メタナイト……それに、シュルク？」
「倒れる直前に、お前達の波導を感じたが……まさか、援軍か？」
「そうだよ。あまり、無茶はしないでよね。ロゼッタでも治せない傷を負わせないために」
そう言ってシュルクはモナドを構え、メタナイトもギャラクシアをゾンビ犬に向ける。
「後は私達に任せろ」
「あ……ああ！」
ルカリオとゲッコウガが後ろに下がった後、メタナイト達はゾンビ犬に立ち向かった。
「行きますよ～！」
ヨッシーが卵の中に入って体当たりを繰り出し、メタナイトが乱れ斬りでゾンビ犬を切り刻む。
ゾンビ犬はルカリオに噛みつこうとするが、
それをシュルクが未来視（ビジョン）で見切ったのかその攻撃は当たらず、反撃でゾンビ犬を斬った。

何度も攻撃を食らったのか、流石のゾンビ犬もよたついていた。
「今ですよ、ルカリオさん！」
「うむ！　はぁぁぁぁぁぁ！」
ルカリオはきあいだめで自らの気を溜めた後、波導を最大限まで高めて大技の構えを取る。
「波導の力を見よ！　はどうのあらし!!」
そして、ルカリオが一直線に波導を発射し、それがゾンビ犬を貫くと跡形もなく消滅させた。
「……終わった、な」
「……終わった、ね」
ようやく戦闘を終わらせ、空を見るルカリオ達。
空は灰色に染まったままだったが、彼らから見ると美しく見えたようだ。
「やはり、この世界は何かがおかしいようだ。波導も、良からぬものが感じられる。
邪悪な……狂気が混ざったような……」
「……？」
「でも、仲間が見つかってよかったですね～」
「そうか、戻るぞ」
「えっ、どうしてですか？　……あ！」
ルカリオに言われ、ヨッシー達ははっと気付く。
そうだ、仲間を探すのが目的だったのだ。
「私とゲッコウガを見つけたのだから、もうここに用はないだろう？」
「そ、そうですね～。じゃあ、ラストホープに戻りましょうか～」
ルカリオに言われ、ヨッシー達はラストホープに戻るのであった。
だが、ルカリオが感じた良からぬ波導とは、一体誰のものなのだろうか……。
それについてはまだ、分からない。

第２０話　けものパニック！

その頃、ドンキーコングとディディーコングは、巨大蜘蛛や蛆の塊と戦っていた。
「ほいっ！」
ディディーコングのピーナッツ・ポップガンが巨大蜘蛛を撃ち抜く。
「ドンキー、こういう大きな蜘蛛って、スクイッター以外にもいたんだねぇ」
「相手が誰であってもやっつけるまでだ！　うおりゃあああああ！」
ドンキーコングはパンチで巨大蜘蛛を攻撃しようとするがあっさりかわされてしまい、
蛆の塊に気付けずまとわりつかれてしまった。
すぐにハンドスラップで吹っ飛ばしたが、ドンキーコングには不快感が残っていた。
相変わらず、ドンキーコングはパワーはあるがおつむが弱い。
ディディーコングはそんな彼をサポートしつつ、自らも果敢に敵に立ち向かう。
「そいやっ！」
ドンキーコングがドンキーヘッドバットで巨大蜘蛛を埋めた後、
ディディーコングは両手を伸ばして巨大蜘蛛に大ダメージを与え戦闘不能にした。
巨大蜘蛛はドンキーコングに向かって糸を吐き、
絡まって動けなくなっている隙に噛みつこうとするが、何故か体が痺れて動けなくなった。
そう、あらかじめディディーコングが足元に痺れるバナナの皮を仕掛けておいたのだ。
「そ～らよっ！」
「ピーナッツ・ポップガン！」
ドンキーコングは狙いを定め、蛆の塊をパンチで怯ませる。
そこにディディーコングの落花生銃が命中し、蛆の塊はバラバラに

弾け飛ぶ。
「うえっ……」
「気持ち悪いね、でも敵は残り一体だよ！
ドンキー、オイラが足止めするから一気に決めちゃって！」
「おう！」
ディディーコングは巨大蜘蛛に飛びかかり、ドンキーコングに攻撃がいかないようにする。
ドンキーコングはディディーコングが巨大蜘蛛に組み付いている間に、
己の腕を振り回して力を溜める。
「どりゃあああああああああ!!」
そして、ドンキーコングのジャイアントパンチが巨大蜘蛛に命中すると、
巨大蜘蛛は空の彼方に吹っ飛ばされ、星になるのだった。
「あー、すっきりした！　っつーか一体ここはどこなんだよ」
「う～ん、オイラは分からないなぁ」
「オレも分からないぜ」
相変わらず、こんなところに飛ばされても能天気なドンキーコングとディディーコング。
悪く言えば馬鹿……だが、暗い世界の中でも明るさを保っていられるのは貴重だ。
「ま、この先に進めば分かるよね！」
「多分な！」
一方で、マルス、ロイ、アイク、ルフレのDチームは、敵を避けながら仲間を探していた。
「僕の予測では、この辺に仲間がいるはずなんだ」
「そうは見えないが……？」
「ちょっと、足元を見てごらん」
「ん？」
ルフレに言われてマルスが足元を見てみると、大きな足跡と小さな足跡があった。

「これだけで分かるのかい？」
「ああ。そしてこの足跡は、人間のように見えて人間ではない」
「どういう事だ……？」
「まぁ、類人猿だと思えばいいさ」
類人猿と聞いて、連想されるのはあの二匹しかいないとロイは思った。
マルス達がその足跡を辿っていくと、向こうから二つの何かと、土煙がこちらに近づいてきた。
「誰だ？」
アイクがその方向をじっと見ていると、
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「助けてくれぇぇぇぇぇ!!」
ドンキーコングとディディーコングが、無数のゾンビ犬に追いかけられていた。
マルス、ロイ、アイクは剣を構え、ルフレは魔道書を開き呪文を唱える。
「マーベラスコンビネーション！」
「噴火！」
「トロン！」
マルスとロイが無数の剣閃でゾンビ犬を切り裂き、
アイクの剣から放たれる蒼炎がゾンビ犬を焼き、
とどめにルフレが唱えた雷魔法がゾンビ犬を全滅させた。
「す、すげぇ……」
「しかもあの炎と雷、何だろう」
彼らがゾンビ犬を瞬殺するのを見たドンキーコングとディディーコングが感心する。
「無事だったかい？　二匹とも」
「……あ、ああ」
「……ドンキーコングにディディーコングか」
「こんなところにいたら危険だから、一緒に帰ろう」
しばらく唖然としていた二匹だったが、マルス達が自分達を助けに

来たと知って我に返る。
　ドンキーコングとディディーコングは頷き、マルス達に同行する事を決めた。
「うお～！　これが剣っていうのかぁ」
　ドンキーコングは、マルス達が持っている剣をまじまじと見ていた。
「えっ？　剣を知らないの？」
「ＤＫアイランドじゃ、こういうのはほとんど見ないからね。その代わり、自然が豊かだけど」
　ディディーコングは武器としてピーナッツ・ポップガンを使用しているが、金属製ではない。
　ドンキーコングとディディーコングは金属でできた武器を見るのは事実上初めてだ。
「僕達の世界では、剣と剣がぶつかり合うからね。ＤＫアイランドがちょっとうらやましいよ」
「こうやってお互いの世界の良いところを見つけ合うのも、また交流、だね」
　皆はわいわいと楽しく話しながら、ラストホープへ戻る道を歩いていた。
「あっ、あとちょっとでラストホープだよ！」
　そして、ルフレのおかげで敵に出会う事もなく、
　もう少しでラストホープに辿り着こうとしていた。
「その、ラストホープって何だ？」
「文字通り、この世界の『最後の希望』だ」
「最後の希望……あー、さっぱり分かんないけど、
　とりあえずここにいれば一安心という意味だな？」
「まぁ、そういう事になるね」
　そして、ラストホープに入ろうとした、次の瞬間。
「わぁぁっ!?」
　突然、空間が裂けたかと思うと、濁った目と鱗を持つ魚の魔物が飛び出してきた。

ルフレ達はこの魔物に見覚えがあったようで目を開く。
「もしかして、この魔物は……！」
ルフレはサンダーソードを構える。
「知ってるのか？」
「うん。以前に僕達がラストホープに戻ろうとした時に襲ってきた魔物だよ。
その時は何とか逃げられたけど、今度は逃がしてくれそうにないみたいだ」
「だから、戦うしかないってのか？」
「明らかに相手は敵対的だしな」
アイクも剣を構え、この魔物に対峙していた。
「なら、オレもやってやるぜ！　相手がこんな化け物だろうと、このパワーで一ひねりだ！」
「オイラだって、やる時はやるんだ！」
ドンキーコングもやる気満々な様子で戦闘態勢を取る。
ディディーコングも、そんな彼をサポートする体勢に入った。
「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」
そして、魔物が叫び声を上げると共に、戦闘が始まった。
「うおりゃぁ！」
「せいっ！」
「たあっ！」
ドンキーコングが転がりながら魚の魔物に体当たりを繰り出し、
そこにマルスとロイのマーベラスコンビネーションが決まる。
魔物は口を大きく開けてドンキーコングに突っ込んできたが、
ルフレがサンダーを放ってそれを防いだ。
アイクは飛び上がって剣を振り下ろすが、魔物はいとも簡単にアイクの攻撃をかわした。
「こいつ、巨体の割に速いな」
「おまけに体力もかなりある……これは、かなり時間がかかりそうだ」
「確実にダメージを与えるために……狙いを定めて、そいやー！」
ディディーコングは魔物に狙いを定めて落花生を発射した。

すると、上手く魔物の弱い部分に命中したのか、魔物が一瞬だけ怯み、
その隙にアイクは居合い斬りで魔物を切り裂いた。
「よし！」
「これは結構効いたか？」
ガッツポーズをするディディーコングだが、
次の瞬間、魔物の体が黒く光り、負っていた傷が治った。
「げぇ！　回復しやがった！」
「くっ、やっぱり手数で勝負をしていたらダメって事か……！」
「なら、オレがでかいの一発かましてやるぜ！」
「ちょっと待って、ドンキー！」
そう言ってドンキーコングは皆の前に出てジャイアントパンチを繰り出そうとしていたが、
ディディーコングが止める。
「なんでだよ」
「ドンキーのジャイアントパンチは隙が大きい。それに、相手はまだまだ元気だよ。
そんな時にジャイアントパンチを出してもかわされて反撃を受けるだけだよ」
ディディーコングはドンキーコングに助言する。
流石はディディーコング、ドンキーコングを上回る知能の持ち主だ。
といっても、ドンキーコングが馬鹿すぎるだけなのだが。
「オイラ達があいつを攻撃するから、
ドンキーはその間に相手の隙を突いてジャイアントパンチを叩き込んで」
「よ、よ～し！」
ドンキーコングは腕を振り回しながら、無い知恵を絞って魔物の様子を見ていた。
ディディーコングは遠距離から落花生を発射し、
ルフレは防御が薄いところを狙ってサンダーソードで攻撃する。

飛び道具がないマルス、ロイ、アイクは、
相手の噛みつき攻撃をかわしながら剣技を叩き込んでいく。
「ガァァァァァァァァァァァ!!」
「うわぁ！」
「くっ！」
魔物は口から濁った水をマルス達目掛けて吐き出した。
水自体は大した威力ではなかったが、それを浴びたマルス達の武器が錆びた。
「しまった！　僕のファルシオンが……！」
本来は錆びないはずの武器が錆びたため、マルスは動揺した。
今、ここで錆びた武器を振れば、壊れてしまう危険性がある。
一刻も早く、決着をつけなければならない。
「ドンキー、もうパワーは溜まった？」
「おう、最大パワーだぜ！」
「よーし、相手の動きを止めて！」
「うん！」
唯一、武器以外にも魔法が使えるルフレが、エルサンダーを唱えて魔物の動きを止める。
「行くぜ！　ジャイアントパンチ!!」
「ギャァァァァァァァァァァァ!!」
そう言ってドンキーコングがジャイアントパンチを繰り出すと、
魔物は今までよりも大きな叫び声を上げ、泥となって地面に落ち、消滅するのだった。
「や、やったぜ！」
魔物にとどめを刺したドンキーコングがガッツポーズをする。
ディディーコングやルフレなど、頭が良い仲間のおかげだ。
「まさか、残党はいるんじゃないだろうね？」
「もう、大丈夫だよ。この辺に敵の気配はなくなってるみたい」
「よかった……」
敵の気配が完全になくなった事がルフレによって確認され、マルス達もほっと一安心する。

「でも、これで仲間を探すために立ち塞がる大きな障害が1つ消えたという事になるね」
「そうなるな」
「これで、安心してラストホープに戻れ……」
そう言って、ルフレが一歩歩き出した瞬間、彼の頭の中に声が響いてきた。
―ボクのペットと遊んでくれてありがとう。
「!?」
声は自分の事を「ボク」と言っていたが、その高い声から女性である事が分かった。
―おやおや、驚いているのかい？
「いきなりテレパシーを受けたら驚くに決まっているよ」
―フフフ。おっと、名前を名乗ってなかったね。ボクはハオス、混沌のハオスだ。
「混沌の……ハオス？」
女性は混沌のハオスと名乗った。
彼女の不気味さにルフレは警戒心を強める。
―キミは今、何をしているんだい？
「怪しい人にそれを言うつもりはない」
―警戒心むき出しか。だけど、話は続けるよ。この世界はどうしてこの有様か、分かるかい？
「……」
―もしも、この世界をこうした黒幕が、ボクだったとしたら……？
「……？」
―まぁ、それは「もしも」の話だけどね。
「……」
―おっと、おしゃべりはここまでにしよう。せいぜい儚い希望に縋って生きてよね。
それを最後に、ハオスの声は聞こえなくなった。
「どうだった、ルフレ？」
「あのハオスという女性は、何を考えているのか分からなかった。

不気味で、少しだけ恐怖を感じたよ……」
「??」
「とにかく、まずはラストホープに戻ろうね。彼女については、戻ってから話すよ」
「ああ」
この世界に住む謎の女性、ハオス。
果たして、彼女は一体何者だろうか……と思いながら一行はラストホープに戻るのだった。